

### 「愛されて愛する」

広島栄光教会 仁科 共子



主は振り向いてペテロを見つめられた。  
ルカ22・61  
わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。  
ルカ22・32、新改訳2017

「ああ主の瞳まなざしよ」と歌い出す讃美があります。その中にペテロを見つめられた主のまなざしを歌っている歌詞があります。それは、このルカ22・61のことです。この時イエス様に見つめられたペテロはどんな風に感じたのだろうと考えます。聖書の記述から見てとれるのは、ペテロが自信満々に「わたしはあなたを知らないなどとは言いません」と言っていたのにできなかった自分の弱さを嘆き、申し訳ない気持ちと情けない思いでいっぱいになったのだらうと思います。

イエス様はどのように見つめられたのだろうとも考えてみました。ペテロを責めるまなざしではなかったと思います。それは、イエス様はペテロをわかっていてペテロのために祈って下さっている

たからです。ペテロがイエス様の愛を感じる事ができたまなざしだったことでしょう。だからこそ、ペテロは自分のしたことを後悔し、悲しみ、泣いたのでしょう。イエス様はペテロを見つめて「わたしはあなたの事がよくわかっているよ、あなたのために祈った。だから、立ち直れる。そして自分が立ち直ったら、他の人を励まし力づけるようになりたい」と伝えられたのではないだろうかと思いました。

イエス様は、私たちの事もペテロと同じように見つめていてくださいます。それで、私たちはイエス様に愛されている事を確認し、その愛に留まって愛に満たしていただくことができます。そうする時、私たちもその愛によつて他の人を力づけることができるようになります。

立ち直ったペテロに、イエス様は「わたしの子羊を飼いなさい」「わたしの羊を牧しなさい。」と言われました。

イエス様は今も、弱い私たちに目を止め、私たちのためにとりなしの祈りをし、わたしたちを主の羊のために用いて下さいます。委ねられている奉仕のためにイエス様の愛を受け取っていきたいと思います。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「みことばが語りかける説教」 教会学校説教への備えのために(2)	4
イサク・ヤコブ 10 / 4 10 / 11	15
キリストの教えと働き 10 / 18 11 / 22	27
クリスマス・年末年始 11 / 29 12 / 27	63
牧羊ひろば(徳島栄光教会)	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

### 〔凡例〕

1. 原語について…ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教出版局)、ホ…「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出版局)、イン…「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ…「ふくいん子どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以上、日本児童福音伝道協会)、PW…「プレイズワールド」(リビングプレイズ)

造り主なる神を知る

創世記 1・1

●イサク・ヤコブ

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

10月4日

天からの梯子

創世記 28・10〜22

同 28・16節

11日

ヤボクの渡し

創世記 32・22〜32

ガラテヤ 2・20節

●キリストの教えと働き

10月18日

人を汚す罪

マルコ 7・14〜23

同 7・20節

25日

不信仰を取り除く

マルコ 9・14〜29

同 9・23節

11月1日

幼子のような信仰

マルコ 10・13〜16

同 10・15節

8日

仕える生き方

マルコ 10・35〜45

同 10・45節

15日

切なる信仰

マルコ 10・46〜52

同 10・52節

22日

収穫感謝

収穫は神の恵み

使徒 14・8〜18

同 14・17節

●クリスマス・年末年始

11月29日

アドベント

預言されたメシヤ誕生

イザヤ 9・1〜7

同 9・6節

12月6日

主を待ち望む者の力

イザヤ 40・27〜31

同 40・31節

13日

ヨセフへの告知

マタイ 1・18〜25

同 1・21節

20日

クリスマス

王なるキリストを迎える

マタイ 2・1〜12

同 2・2節

27日

年末感謝

恵みへの感謝

詩篇 118・1〜6

同 118・1節

# みことばが語りかける説教

## 教会学校説教への備えのために(2)

舞子の丘教会 宮澤清志



### 四、説教原稿(メッセージノート)を作る

前号(前半)においては、メッセージの内容について語りました。これまでの流れを大まかにいえば「み言葉から聴く工程」、「み言葉が語りかけてくる工程」を学んだわけです。そして、これからの工程は「み言葉を語る工程」へと入っていきます。

まず、これまでの流れをつかむためには「ノート」を使います。これまでの黙想の中でためてきたノートを読み返してみます。それらを整理していくことによって、説教が形作られていくのです。

#### ①説教のスタイルと構成要素

教会の歴史の中では、様々な形で説教が語られてきましたし、今もなお様々な形で説教が語られています。いくつかの説教のスタイルはあるのですが、どのスタイルが最善かということはありません。語る説教者によっても異なりますし、語る場においても異なるからです。ですから、説教スタイルの善し悪しをここで取り上げることはできませんが、説教のもつ構成要素については、おおまかに以下のように展開されると思います。

## a. 導入

導入は、これから語られることに期待感を呼び起こす働きを持ちます。聴き手をワクワクさせる言葉を読むのです。これからどんな話が始まるのか、聴き手の心を話し手とその語るメッセージとにひきつけるのです。具体的には、先週のメッセージの復習（橋渡し）であったり、中心聖句や主題のための問いかけ、あるいは近況にも多少触れながら、聴き手の心を話し手に向ける語りかけになるでしょう。

この導入に関しては、三つの目的があるといわれます。

- (1) 興味と関心をよび起す
- (2) 主題を提示する
- (3) 話の方向付けとムードづくり

最近身近に起こった出来事や、子どもの心のニーズなどから、導入の突破口を開くこともできます。同時に語り手が独特のキャラクターをもっている場合、それらも導入の良い要素となります。この学びも、やはり聖書が示してくれます。主イエス様がその教えに際して語られた導入、たとえばニコデモとの対話に際しての導入（ヨハネ3章）や、サマリヤの女性との対話で用いた導入（ヨ

ハネ4章）を学ぶことは、よい例となるでしょう。

## b. 本論（展開）

導入において子どもの心をひきつけたら、次は本論に入ります。この部分が真の中身となります。

聖書のストーリーを追いかける「再話」が中心となります。聴き手を、その聖書個所の時代と状況へとタイムスリップさせるのです。その聖書個所の話の中で起こっていることを再び語り直すのです。ここで大切なことは、聖書の中の登場人物がイエス様と出会う時には、聴き手の子どもたちも一緒になってイエス様と出会うということです。この時に、聴き手の言葉、イエス様の招きの言葉や適用、例話などをを用いながら、子どもたちを聖書の世界に引き込むのです。

## c. 結論

今まで話してきたことの結びです。「そうだ！ほんとうだ」と自然に納得できるような結びが必要です。他人ごとではなく、自分のこととして受け取らせることが必要なのです。「さあ、あなたはどうしますか」と、子ど

ものの決心を促す言葉を最後に語りましょう。

だからといって、「だからこうしましょう」というような、いわゆる紋切型のような結びでは、あまり幼子の心に届きません。すべての幼子に救いの言葉が語られ、幼子もその言葉を救いと希望の言葉として聞く結びでありたいものです。

以上の骨組み（説教の構成要素）を考慮しながら、いよいよ原稿にメッセージを落としていきます。そこで、そのために心に留めるべき注意点を列挙します。

## ②原稿作成の注意点

### a. 主題を大切に

「主題」は、説教全体を貫く柱です。導入から適用、結論に至るまでの一貫した流れの中心にあるものです。すべての流れがこの主題から流れ出ます。大人の説教でしたら多少脱線しても比較的時間はあるものです。しかし、子どもの説教は短時間です。脱線をする時間的余裕はありません。脱線してメッセージがばやけることのないように、常にこの「主題」を意識して備えましょう。

### b. コンパクトにまとめる

ポイントをしばってコンパクトに、メッセージ全体をまとめたものにします。メッセージの所要時間は子どもの年齢や語る状況によって異なりますから、一概に決めることはできません。しかし、コンパクトであるということとは共通して求められます。一生懸命準備したものの、すべてを語りなくなるものです。しかし、主題と離れたものは、あえて捨てる勇氣を持つことは大切なことです。準備したことは決して無駄にはなりません。

### c. 想像力を働かせる

まず、備えのうちに、聖書のストーリーの中に自らが入り込むようにして備えることが肝要です。聖書のイメージをふくらませましょう。登場人物の心の動き、情景を感じ取りながら備えることです。しかし、同時にそのようなイメージが頭の中だけで留まっているならば、十分伝達することはできません。その想像力を五官をつかって表現するのです。効果的に、楽しく子どもに伝達する工夫をしましょう。

## d. 補助教材を考える

メッセージのストーリーと主題を考えながら、補助教材を考えます。子どもたちの状況や語る状況、自分自身の賜物をよく考えながら、どのような補助教材がふさわしいか、よく検討します。自分の得意な補助教材を持つことも大切です。しかし、同時にバリエーションを持つことも必要です。しかし、あくまでも補助教材です。どんなに便利でも、「はじめに補助教材ありき」ではありません。まずみ言葉からの語りかけが優先されます。また、補助教材であっても利点と欠点があることもわきまえながら、準備したいものです。

一般的に、補助教材（特に視聴覚用材）の利点としては、

- ・興味を喚起する（特に導入には効果的）。
- ・理解を助け、記憶に残る。
- ・現代の日本とは時代、場所、文化が異なる聖書の世界を説明するには良き助けとなる。

一方、欠点としては、

- ・それなりの準備が必要。
- ・その視聴覚教材を使用する目的がはっきりしないと、

かえって主題がぼやけてしまう。

- ・視聴覚教材のインパクトによつて、聖書のメッセージが飛んでしまう可能性がある。

等が考えられます。しかし、いずれにしても、子どもの発達段階から考えると、補助教材は必要不可欠な要素であろうと思います。

さて、いくつかの補助教材を紹介しましょう。

**フラッシュカード** 牧羊者でも用意されており、皆さんもよく用いている教材です。利点としては、使用していただくと思いますが、ストーリーを順序だてて追っていくには好ましい教材です。また、絵が苦手な人でも用いることができます。一方で、手がふさがることが少々難点です。しかし本来、フラッシュカードは紙芝居とは異なり、一時的に絵を見せて聞き手に印象を残すためのものです。あくまでもストーリーが中心です。

**フランネルグラフ** フランネルボード（ネルとよばれる布を張り付けた板）にネルで作った背景を張り付け、フィギアと呼ばれる人間や動物などを張り付けてメッセージを語る教材です。フィギアを移動させたり取り外した

り、また新しい背景やフィギアをつけることによって、メッセージが展開されます。ストーリーの展開には有効な教材です。

ペープサート 視覚教材の中では、手軽にできる教材です。同時に、動きもつけられる教材として用いることができます。しかし、両手がふさがるという点は欠点と言えるかもしれません。

パペット 聞き手の幼子にとっては、非常にインパクトのある教材です。動きもつけることができますし、ストーリーも対話形式で進めることができます。掛け合いの妙という点では優れた教材です。しかし、自分で作るには技術が必要なですし、それなりにコストもかかります。

オブジェクト 時計やバットといった、身の回りの物を用いて物語る方法です。導入の部分で用いるには良い教材です。同時に知恵さえあればどのような物であっても工夫して用いることができます。

パワーポイント（OHP等、スクリーンに映し出す教材）最近では賛美の歌詞や聖書のことばをスクリーンに映し出している光景をよく見かけますが、時代の要請もある

のでしょうか、よく見かける教材の一つです。現代的で、画面も大きいので見やすさでは優れています。一方である程度の技術も必要です。一歩間違えれば興ざめする、といったリスクもあります。

自分自身 何よりも、聞き手の目の前にいる自分自身が、最高の視覚教材です。生きた視覚教材として、これほどの教材はありません。声やジェスチャーはもとより、何気ない一つひとつのしぐさによって聞き手への伝わり方は変わります。著者の体験では、人は「なくて七クセ」。奉仕をしていた教会で、CS教師の訓練として教師の説教をビデオに撮って、様々な角度から検討し合ったことからその礎が築かれました。オススメです。

#### e. 例話の用い方

例話（イラストレーション）は、「説明」、「解明」という意味があり、ラテン語では「窓から入る光線」という意味を持つ言葉です。ス波尔ジョンは、「例話のない説教は、窓のない家のようなものである」と言ったそうです。ですから、ピットリした例話は子どもの説教の理解を助け、それ自身が美しく光り輝くものです。



しかし、例話は、それ自体が目的ではありません。聞き手に理解を促し、適用、決断へと導く手段として重要な役割を果たすものです。聖書に、主ご自身も「たとえば、知らないでは何事も彼らに語られませんでした」（マタイ13・34）とあるとおりです。

では、例話の目的は何でしょうか。

・「例えの話」とあるとおり、例話とは説教を絵で見せるように明らかにすることです。筋がのみこめない箇所であっても、効果的な例話は前後のつながりを明らかにします。

・説教を面白くするものです。説教は、前回も見たように「一つの主題」と「一つの目的」をもって語られます。ですから重要な部分が重複するものです。そこで、一定の調子での重複を避けるために例話が必要になります。説教の単調さを避け、説教にメリハリをつけるためです。

次に、このような例話の探し方をご紹介しますよう。  
・観察することです。大自然から始まって、日常の私た

ちの生活の中で起こったさまざまな出来事に常に関心を持つことです。また、読書のような観察の仕方もあります。新聞をよく読むこと、テレビを見ながら例話を探すことも益があります。言ってみれば、日頃の心構えが説教を語るうえでは大切なのです。

・経験することです。自らの経験は、説教を語るうえで最大の武器になります。

・そして、最も大きな例話の宝庫は聖書そのものです。「聖書の最大の注解書は聖書である」という言葉があります。聖書の中の人物に重点をおいた例話、ある出来事に重点をおいた例話など、その引き出しは枚挙にいとまがありません。

## 五、説教を語る

### ①「信仰」―信じるいう―

さて、このようにして説教ノートができました。実は、これで準備終了、ということにはなりません。最後に仕上げの準備として「信仰」―信じること―が挙げられます。

す。実は、私自身、説教の準備は原稿で終わる！とCS教師時代は信じていました。原稿作成が終わると一件落着！そのような考えでいました。しかし、実は真の説教はここからです。実は、説教における原稿作成とは、自らのなすべきところを全うした、ということ。自らのこれまでの様々な取り組みの中の最善を主におさげした、ということにすぎません。あとは、私たちの信仰と、信仰に対する主の応答を待ち望む、という領域に入ります。実は、この領域こそが、わたしたちが主の奇跡を見せていただくクライマックスなのです。

#### a. 聴き手（子ども）の理解力を「信じる」こと

子どもたちは、表面上はどんなにふざけているように見えても福音を聴きたがっているということです。福音に飢え渴いているのです。その中で、十字架の愛を必要としているのです。

#### b. 聖霊の導きを「信じる」こと

神様は、教会に福音を委ねられました。教会に生きる私たちに福音を託されたのです。この不完全な教会に、

福音宣教を託されたのです。そして、子どもたちに対する福音宣教をあなたに委ねられました。そこには、神が聖霊を通して私たちに語る力をお与えになることでしょ。その力を信じることです。

#### c. 福音の力を「信じる」こと

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である」（ローマ1・16）とあるように、子どもたちが福音の力を受け止める時、彼らの生涯は変えられます。福音力は「デユナミス」（ダイナマイト）の力なのです。この「福音の力」に信頼しましょう。

#### d. 祈りの力を「信じる」こと

あなたはひとりではありません。子どもたちの前に立つ準備をしてきました。貴い時間をささげて準備をしてきたのです。そして何より祈り備えてきました。そしてそのあなたのために多くの祈りが積み重なりました。その「祈りの力」を信じることです。

## ②語り方について

そして、いよいよ言葉を通してみ言葉を語ります。語り方についての具体的なアドバイスとしては、次のようなものがあります。

### a. 子どもたちの顔を見渡ししましょう

前に立つたら、まず祈り心でゆっくりと全体を見渡します。子どもたちが今どんな顔をしているか、目はどこを向いているか、いろいろと周りを見回します。説教とは、独り言ではなく、子どもたちと、その子を取り囲む天使たち、そして何よりも三位一体の神に対する宣言です。子どもたちと目と目を合わせて見つめていると、不思議に子どもは落ち着き静かになるものです。

### b. 出だしが肝心

子どもたちは、期待をもって説教者の語る言葉 wait ています。子どもたちへの説教は、最初の三分が肝心です。その三分で、子どもたちの心を説教者を通して語る言葉にひきつけるのです。子どもは正直です。その三分

で説教のすべてが決まる、と言っても過言ではありません。はじめの導入部分は丸暗記するくらいの気持ちで語りたいものです。

### c. 原稿から顔を上げて

「子どもたちの顔を見て語る」ことは、何も出だしに限ったことではありません。できれば最初から最後まで、この調子で語りたいものです。説教とは聴衆とのコミュニケーションであり、何よりもそれによって子どもたちは多くの反応を示してくれます。いろいろと工夫をしながら、子どもとのコミュニケーションを取ってみて下さい。また、そのためには説教原稿から顔を上げることも必要です。多少、話が前後したり飛んだりしても、そこは語らせて下さる聖霊にゆだねて話をして下さい。説教原稿そのものを講壇に持つていくよりは、原稿をアウトラインにして持つていく方が良いでしょう。

### d. 声を大切に

声の大きさやお話のスピードに気をつけましょう。特に、説教の佳境(かきょう)の大切な部分はゆっくりと、抑揚(おさよう)をつけ

て話をしてください。早口では何を話しているか分からなくなることがあります。また、「間」を大切にしましょう。適度な「間」を入れることは、聴き手に考える時間を与えます。ゆっくりと、語りかけるように話しましょう。

#### e. 時間を大切に

語る状況にもありますが、説教時間はおむね7～15分程度で語りましょう。現代の特徴の一つは、「待つ」ことのできない時代であるということです。その顕著な例が子どもたちです。子どもは正直です。あまり長いと即座に体の反応が返ってきます。

## 六、受け止められたメッセージ

実は、説教という行為はここで終わりではありません。説教を語るという行為は終わるのですが、説教者を通して語られた神の言葉が聴き手の耳に入り、頭と心で理解され、行動として移されるようになるまでが説教者の領域であると言って良いでしょう。その意味では、その後

の私たちの考慮されるべき点は大別して2つあります。

### ①聴き手の子どもたちの魂への配慮

教会学校の説教という行為は「説教者個人の領域」であると同時に「説教者の属する共同体（教会）の領域」でもあります。教会学校教師によって語られた説教は、教会学校全体で伝え、また受け止めます。それぞれの発達段階は異なることでしょうし、生活環境や性格、背景も千差万別でしょう。そのような中で子どもたちに福音を手渡したなら、それらが生活に適用されるよう、教会学校全体で知恵を絞って考えるのです。

### ②説教の評価

説教は教会（学校）全体のわざであると同時に、もちろんそれは説教者個人のわざでもあります。語り終えたメッセージは取り消したり、語り直すことはできません。しかし、それらは次へ生かすことはできるのです。翌週の説教へ、また次回のその担当者の説教へと引き継ぐこ

とができます。説教は神の言葉として語られます。ですから、それを評価することには抵抗があると考えられる方も少なくありません。しかし、説教を評価することは必要なことです。

## a. 自身による評価

まず、説教を評価するのは「説教者自身」です。自分の説教について、自らが気づいていることがあるはずです。人は気づかなくとも、自分では気づいている部分をきちんと評価するのです。それらを書き留めてみることです。

## b. まわりの教師たちの評価

次に、「まわりの教師たち」に評価してもらうことも必要です。自分では気づかないことも、客観的な視点で確認してもらうことができます。その評価を、まず受け止めることです。言い訳や反論ではなく、まずは受け止める心の姿勢を持つことが大切です。

## c. 子どもたちの評価

そして何よりも、「子どもたち」の評価です。子どもたちは、あなたが語られたことをそのままに受け止めます。メッセージ中の彼らのしぐさや応答の中に、それらは反映されてきます。同時にそれは彼らの生き方の中にも反映されてきます。説教者や教会は、そこを見落としてはなりません。

## d. 聖書による評価

もう一つ、それは「聖書」による評価です。これらの評価は何よりも、聖書に照らした評価でなければなりません。説教が終わって、自分は果たして聖書に即して説教が語れたかどうか吟味することも必要でしょう。

## 七、最後に

これらのことを、何一つ怠らずに一週間で行う、ということになれば、もう不可能に近いことも知れません。しかし私たちは、「説教の準備は一週間でするものである」という間違った思い込みをまず捨てる必要があります。

す。各教会学校においても、一ヶ月前には当番表ができあがっているでしょうし、「牧羊者」も一ヶ月以上前にお手許に届けられます。毎週説教をしている教師の方はほぼおられないでしょうし、何よりも説教の準備は楽しいものであるということに気づき、一度体験していただければ、説教のための準備はより良く進められていくと思います。

たとえば月に一回説教の順番がまわってくる、という人は、ひと月を4週に分割し、次のような計画はどうでしょうか。

(例) 一ヶ月計画の説教準備

・1週目…み言葉の黙想      ・2週目…聖書研究  
・3週目…説教のための黙想      ・4週目…説教原稿作成  
通勤電車の中や、家事の合間の時間を用いて、といった具合です。時間の用い方次第で、無理なく次の説教に備えることができるでしょう。

また、やはり一週間で備える、という人は、次のような段取りはいかがでしょうか。

(例) 一週間計画の説教準備

・月曜日…火曜日…み言葉の黙想  
・水曜日…木曜日…聖書研究(わからない箇所は各教会の祈祷会で牧師先生に聞いてみる)  
・金曜日…説教のための黙想  
・土曜日…説教原稿作成

説教への備えは息の長い働きです。信徒教師の方は日頃の仕事の合間に説教の備えをしなければならず、大変だと思います。しかし、子どもたちの変化を間近に見られるということは、大変光栄な、だいご味ある働きであるとも言えます。また、「早く行きたいなら、一人で行きなさい。遠くへ行きたいなら、一緒に行きなさい」ということわざがあります。教会学校の働きは、「みんなと一緒に行く」教会全体の働きです。教会全体が、CS教師の説教のために覚えて祈り、そして、一緒に前進させていきたいと思います。

皆さんのためにも、お祈りしております。

〔「牧羊者・二〇二二年度Ⅲ巻」より再掲〕

## 聖書

創世記28・10〜22

## タイトル

天からのしるし

## 暗唱聖句

まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。 創世記28・16

## 目標

共におられる神に目を向けて生きる。

## 導入

(和田牧子)

みなさんは「ひとりぼっちになっちゃった……どうしよう」という経験はありますか？ いつもいてくれる家族や友だちが見えたらなかったら、心配だし、さみしいですね。今日のお話の主人公、ヤコブはひとりぼっちで、途方にくれてしまいましたよ。ヤコブの気持ちになって考えてみましょう。

## ひとりぼっちになったヤコブ

ヤコブはイサクの子でもあります。ふたごのお兄さんエサウがいます。当時、イスラエルの国では、一番上のお兄さんには特別な祝福がもらええるという約束がありました。しかし弟ヤコブはお母さんのリベカと力をあわせて、エサウのふりをし、お父さんをだまして祝福を横取りしてしまいました。

かんかんになったエサウは、「お父さんが亡くなる日も近い。そうしたらヤコブを殺してしまおう！」と言いました。そうなるのはたまりません。ヤコブはお母さんのアドバイスにしたがい、遠く離れた町に逃げることにしました。リベカお母さんのふるさと、ハランという町です。

ハランはこれまで住んでいたベエル・シェバという町から900キロほど離れていました。日本でいうと東京から本州の西のはて下関くらい離れているのです。初めて一人で家を離れ、ひたすら旅を続けるヤコブ。ほんとうに心細く、さみしくてたまりませんでした。みなさんは、一人でそんなに遠くへと旅したことはありますか。

気がつくとも知らぬ町にきていました。誰も知っていない人なんていません。もう夜です。疲れはてたヤコブは野原で横になるしかありませんでした。枕は石です。痛そうですね。横になりながらいろいろなことを考えたでしょう。「お母さんはどうしているかな。」「エサウ兄さん怒っているだろうな。追いかけてきたらどうしよう!」そう思うとますます怖くて悲しくてたまらなくなってしまう。



## 天からのしし

やがてヤコブは眠りにつきました。すると夢を見ました。みなさんはどんな夢を見ますか？ ヤコブが見たのはこんな夢でした。一つのはしが地の上に立てられました。そのいちばん上のはしつこは天まで届いていました。そしてみつかいたちが、そのはしごを上ったり下りたりしていたのです。それだけではありません。主なる神様がその上に立って、こう言われました。

「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主です。わたしは、あなたが横たわっているこの地をあなたとあなたの子孫に与えます。見なさい。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰ります。わたしは決してあなたを捨てません」。

とっても心強い言葉ですね。ヤコブは一人ぼっちだと思っていました。何とそこには父なる神様がともにいてくださったのです。神様がともにいてくださること…これほど安心なことはありません。ヤコブは言いました。「まことに主はこの場所におられます。それなのにわたしはそれを知らなかった！」

ヤコブの心の目が開かれ、今まで見えなかった神様に目を向けることができたのです。ヤコブと神様との出会いの瞬間でした。

ヤコブは翌朝早く起きて何をしたでしょう。自分が枕にしていた石を取り、それを記念に立てて石の柱とし、柱の頭に油を注ぎました。心から神様を礼拝したのです。そしてその場所をベテルと名づけました。ベテルとは「神の家」という意味です。風がひゅーと吹き、星空がまる見えの心細かった野原が、何と「神の家」になったのです。

## 結び

もしみなさんが、ひとりぼっちだな…心細いな…と思う時があったなら思い出してください。主なる神様がそばにいてくださることを。神様は全世界の一人ひとりのことをちゃんとご存知で、目をとめてくださっています。たとえ目に見えなくても、確かに生きて働いておられます。「わたしは決してあなたを捨てません」と約束してくださいますよ！

♪神さまといつもいっしょ♪ (イン73)



# 聖書 創世記28・10～22

## テーマ 天からの梯子

序論

(高橋頼男)

ヤコブは、母リベカと共に謀し、老いた父イサクを偽って、ついに兄エサウから長子の特権を奪い取ってしまいました。だまされたイサクは怒りにふるえ、エサウは泣き叫んで、失った長子の特権を求めましたが、一度ヤコブに渡った祝福はもはや移り変わることはありません。エサウはヤコブを深く憎み殺そうと決心しました。それを知った母リベカは、ヤコブを遠いパダンアラムの地に逃れさせました。

### 一、孤独な旅(1～5、10～11)

母と別れ、故郷を離れ、悲しみと不安を胸に抱いて一人旅するヤコブの心は、まことに切なくわびしいものでした。いまさらながら、兄に対する恐れ、老いた父を欺いた悲しみ、溺愛してくれた母の懐かしさが次々に思い起こされて込み上げてきます。ヤコブもこれまでの自分の悪事を思わずにはいられませんでした。「自分は何かいうことをしてきたのだろう」。初めて、悔いのこころ

が起りました。これからどうなるのだろうか、将来に対する不安が襲ってきました。そして、今、まさに自分はひとりぼっちであることを思い知らされたのです。忸怩たる思いで、ひたすらさみしく心細く、石を枕にいつしか眠りにつきました。

### 二、神との出会い(12～17)

眠りに落ちたヤコブは、その夜、一つの夢を見ました。それは不思議な夢でした。一つの梯子が天から地にまでくだって立っていました。その上を神の御使いたちが上り下りしているのです。その光景の中から、ヤコブ自身に語りかける主の声が聞こえてきました。(わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。)その瞬間、ヤコブはこれまで伝え聞いていた祖父アブラハムを祝福した神、父イサクに現れた神を思い起こしました。その神が今、ヤコブにも現れてくださったのです。「ヤコブよ、お前は恐れ悲しみつつ、たったひとりで不安な旅を続けている。しかし、お前は一人ではない。わたしはお前と共にいる。お前がどこに行くにも、共にいてお前を守る。わたしは、決してお前を見捨てはしない」。思いがけない神からのことばは、慰めに満ちたことばで

した。この経験はヤコブにとって大きな転換点となりました。「わたしは知らなかった。そうだ、わたしは一人ではなかったのだ。こんなわびしい、一人ぼっちの愚かな自分に、主はその御目を注いでいてくださったのだ。こんな者と共にいてくださったのだ」。ヤコブの霊の目が開かれた瞬間でした。今まで恵まれた環境の中で育ち、自分を愛し守ってくれる人々の中で自由に思いのままに生きて来たヤコブでした。兄を出し抜いて長子の特権さえ手に入れたのです。しかし、今、追われるようにして故郷を後にして、一人、孤独な旅の中で初めて知ったのは自分の本当に醜い罪深い姿でした。しかし、このような自分に対して、神はみこころに留めてくださり、共にいてくださるというのです。「ヤコブの神との出会い」こそ、新しいヤコブの誕生の瞬間でした。

フランスの哲学者ブレーズ・パスカルは、多くの思想遍歴の後、ついに自分の神を見出したのです。その時、彼は『「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、哲学者や、学者の神ではない。確かだ、確かだ、心のふれあい、よろこび、平和、イエス・キリストの神」と、歓喜の叫びをあげました（パンセ737・4〜6、田辺保訳）。

### 三、ベテルの経験（18〜22）

人生は、人間の目から見ると、偶然や不思議に満ちています。ヤコブは故郷を追われ、孤独な旅の中で野宿するという状況で、「こんなところで、こんな自分のために、神が共におられる」という驚くべき恵みを見出したのです。「神が共におられる」ということ、これこそ、すべて悲しむ人、孤独な者、自分の弱さを知らされる人、罪を思い出して自責の念にかられ思い悩む人にとって、真の救いです。ヤコブは、今や「わたしの神」となってくださった主を恐れかしこみ、その体験の場所に石の枕を立てて油を注ぎ、天の門と呼び、ベテル（神の家）と名づけました。「神われらと共にいます」は、私たちの救いそのものです。そして、主イエスこそ、私たちのインマヌエル（マタイ1・23）です。様々な状況や出来事の中で罪深い自分を知らされ、そこでキリストの救いを知ることこそ、わたしのベテルの経験です。

### 結論

こんなところにとと思われる場所に、共におられる神に目を上げていきましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

ヤコブは父イサクを欺いて兄エサウの祝福を自らのものとした(27章)。そのため母リベカはエサウに命を狙われたヤコブを逃がすために、妻をめとるためという口実でハランへと行かせた。ヤコブはその孤独な放浪の旅路において神に出会うのである。これは彼にとって最初の個人的な神との出会いの経験であった。

## テキスト

10 ハラン ベエルシバからベテルを通り、ハランまでの旅路は880キロ以上になる。

11 一つの所に着いた時 「着いた」(ハ)パーガ)は「遭遇した」「出会った」という意味で、偶然の意味合いの強い言葉。人間的には偶然と思えることも神の側からは必然である。

12 ここには「見よ」と訳せる言葉が二回使われている。つまり、夢の中で見た幻は驚くべきものであった。一つのはしごが地の上に立っていて「はしご」(ハ)スーラーム)は語源的には「積み上げる」(ハ)サーラル)から来ていることから、高速道路のランプのような傾斜した道か、

階段のようなものともとれる。ここで重要なことは天と地を結ぶものであるということ。新改訳2017では別訳として「地に向けて」とあり、地からのものではなく、天からのもの、つまり、人からの接近ではなく、神からの接近であることを強調する訳もある。神の使たちがそれを上り下りしているのを見た 御使いは救いを受け継ぐ人々に奉仕する者であるから(ヘブル1・14)、この光景は神がヤコブを保護されることの約束(15)の保証を暗示するものである(詩篇34・7参照)。また、このはしごは神と人とを結ぶ道であるキリストの予表でもある(ヨハネ1・51参照)。

13 主は彼のそばに立つて言われた 主の臨在への気づきは、主の御声を聞くことから生まれる。ここでヤコブが契約の継承者であることが確認される。

14・15 ここには子孫の繁栄、子孫による地上のすべての民族の祝福についての約束がなされている。これはアブラハムやイサクにも約束されていた事である。それに加えて、主がヤコブと共におられること、主は約束を成し遂げるまで決して見捨てないことが示されている。実際にその後ヤコブの歩んだ道のりは険しいものであり、

約束が成就するまで、主の臨在は不可欠であった。主が共におられることこそが契約の根本であると言える。

16 まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。家を離れ、今まで親しんできた礼拝の場所を離れ、非常に孤独感を感じている時に、この予期しない所で主の臨在を知った驚きが表れている。利己的な罪深い自らをも顧みてくださり、共にいると約束してくださった主の恵み深さへの驚きでもあろう。

17 神の家 神の臨在の場所。人生の旅路のどこにでも神と対面する「神の家」がある。天の門 神の臨在に触れることが許された場所を示す表現。

18 石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いで 石そのものを神格化したのではなく、神がヤコブに現れ、アブラハム、イサクへの約束を引き継がせてくださったことを証する記念碑として。油を注いで 契約あるいは誓いが神聖であり、冒すことのできないものであることを表す象徴的な行為。

19 その所の名をベテルと名づけた アブラハムはベテルで二度祭壇を築き、礼拝している(12・8、13・3)。アブラハムの時代の記事に「ベテル」を用いているのは、

後に名づけられた地名で説明しているため。ヤコブは、ここがかつてアブラハムが祭壇を築いて礼拝した場所であることを知らなかったと考えられる。このような場所に導いて、同じように神の名を呼ばせることに神の摂理を見る。

21 安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう 新改訳2017では「無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり」(聖書協会共同訳もほぼ同じ)となっている。いずれにしても22節のヤコブの誓いを果たすための条件のような形で書かれている。しかし、これは疑いを含んだ言葉ではなく、神の約束に基づいての誓願と取るべきであろう。新改訳第二版は「私が無事に父の家に帰ることができ、主が私の神となつてくださるので」と、ヤコブが約束の実現を確認し、先取りしたように訳している。

22 十分の一 所有物の聖別である。ヤコブの場合は、律法によるものでなく、自由意志によるささげものである。アブラハムにならったのかもしれない(14・20)。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、G. J. Wenham (Word) 他

## 聖書

創世記32・22～32

タイトル  
暗唱聖句

ヤボクの渡し

生きているのは、もはや、わたしではない。

キリストが、わたしのうちに生きて

おられるのである。ガラテヤ2・20

## 目 標

自我が砕かれ、キリストにある勝利をもつて生きる。

## 導入

(和田牧子)

先週はヤコブがふたごのお兄さんであるエサウに殺されることを恐れて、旅に出るお話でした。石の枕で寝ていると、夢を見ましたね。あの後、ヤコブは無事にハラに到着し、リベカお母さんのお兄さんであるラバンのもとで二十年間一生懸命働きました。毎日大変なことの連続でした。そしてついにヤコブは、イサクお父さんのいる故郷に帰ることになったのです。

## ヤコブの不安

ほんとうに久しぶりに家族と会える！ ヤコブの奥さんであるラケルとレア、そして十一人の子どもたちも紹介できるし、楽しみなはずですが・・・大きな不安がヤ

コブにはありました。そうです。故郷を出発するときカンに怒っていたエサウお兄さんは、今頃どうしているでしょうか。ヤコブは不安でいっぱいになりました。

そこでヤコブは使いの者をエサウのもとにやり、エサウが怒っていないか探りに行かせました。帰ってきた使いは何と言ったでしょう。「エサウさまがあなたのもとに向かっています。400人の方が一緒にいます！」それを聞いて、ヤコブはますます怖くなりました。

そこでヤコブは、お兄さんの怒りをしずめるために贈り物を考えたり、自分は旅の行列の一番うしろを歩くようにしました。自分の知恵と力をフル活動させて、何とかこの困難を乗り越えようとしたのです。みなさんならこんな時どうしますか？

## ヤボクの渡し

ヤボクという川にやってきました。ヤコブは二人の奥さん、十一人の子ども、そしてしもべや家畜たちを、川の向こうへと渡らせました。そしてヤコブは一人だけ後に残ったのです。エサウのことが怖くて足が前に向かなかったのでしょうか。それともいよいよお兄さんと会う前に、神様に祈らなきゃ...と思ったのでしょうか。

その夜のことです！ ある人がヤコブに夜明けまで戦いをしかけてきました。その人はどうしてもヤコブに勝てないのを知り、彼の太ももの関節を強く打ちました。するとヤコブのものも関節が外れたのです。ヤコブの脚はガクンと力が抜けてしまいました。その人は言いました。「わたしを去らせなさい。もう夜が明けてしまいました」。しかしヤコブはしぶとく言いました。「わたしはあなたを去らせません。わたしを祝福してくださいさなければ！」そう、ヤコブはわかつていたのです。この戦っている相手こそ神様のみつかい、神様ご自身であることを。その人は言いました。「あなたの名前は何かというのですか？」「ヤコブです」。「あなたの名はもうヤコブとは呼ばれません。イスラエルです。あなたが神と、また人と戦って勝ったのですから！」そしてその人はヤコブを祝福しました。

### わたしではなく神様

ヤコブはこの不思議な戦いを体験し、どうなったでしょう。今まで不安と恐れでいっぱいでしたが、神様がともにいてくださるから大丈夫だ！という安心感で一杯になったのです。わたしの計画でもなく、わたしの力

でもない。神様がともにいてくださることこそが、何より心強いのだとわかったのです。そしてムクムクと勇気がわいてきました。何と旅の先頭に立って、エサウお兄さんに無事に会うことができたのです。お兄さんは怒っているどころか泣いてヤコブを抱きしめてくれましたよ。ヤコブは気が小さくするがしこいところがありました。自分の力であれこれ計画しては、人生を乗り越えようとしてきました。神様と出会ってからまだ「わたし、わたし」：わたしが一番だったのです。しかし神様はそんなヤコブをどこまでも愛し、自己中心なヤコブの心を砕いてくださいました。恐れで一杯になっているヤコブにまたもや神様は近づいてくださり、祝福してくださいのです。

### 結び

今の時代に生きるわたしたちには、イエス様がいっしょにいてくださいます。イエス様を信じ仰ぐことは、イエス様が内側に生きて働いてくださることです。これほど心強いことはありません。わたしたちは弱虫でもイエス様が強いお方だから、だいじょうぶですよ！

♪フリー♪ (イン40、PW56)



# 聖書 創世記32・22～32 テーマ ヤボクの渡し

序論

(高橋頼男)

ヤコブは叔父ラバンのもとに身を寄せ、そこで20年過ぎました(29～31章)。彼はラバンの娘レアとラケルをめとり、そのはしめの子たちを含む11人の子を得ました。大変な苦勞をしましたが、神の祝福によって家畜やしもべも大いに増え、その地で財を成す者となったのです。ラバンは成功したヤコブをねたみ、以前のように好意を示さなくなりました。また、どんなに成功し生活が安定しても、決して異郷の地に安住しないアブラハムの精神がヤコブのうちにも生きていました。そうしたある日、ベテルで語りかけられた主なる神が現れ「あなたの先祖の国へ帰り：なさい。わたしはあなたと共にいるであろう」(31・3)と語られたのです。ついに彼はその地を出て、再び故郷に向かうことになりました。

## 一、故郷に帰る(32・3～21)

ただひとり、孤独と不安とを胸にいだいて故郷を逃れた時とくらべて、今回の帰郷の旅は何という大きな違い

でしょう。ヤコブは一族を引き連れ、多くの財産を得て、意気揚々としていたかもしれません。しかし故郷が近くにつれて彼の心は暗く重くなりました。20年前、仲違いして別れ、憎しみと殺意さえ抱いたという兄エサウが果たして彼を受け入れてくれるでしょうか。ヤコブは兄との問題を引き延ばしにしましたが、今、決着をつける 때가来たのです。赦されていい罪、解決されていい問題は、必ずこのような時を迎えるのです。

一行がヤボク川の渡し場にさしかかった時、彼の心はついに不安でいっぱいになりました。彼は、兄エサウのもとに使者と贈り物を先に送り、周到な準備をしました。が、それでも不安と恐れはつるばかりです。

## 二、ヤボクの経験(22～32)

ヤコブはひとり、川のほとりに眠られぬ夜を過ごしました。その夜、一人の見知らぬ人が現れ、ヤコブの前に立ちはだかったのです。そして、一晩中ヤコブと組み打ちをしました。ヤコブはその方が、見知らぬ人の姿を取られた神であるとわかりました(32・30)。不安と恐れのだただ中で、ヤコブは全身の力を振り絞って「神と四つに組んだ格闘」(激しい祈りと信仰による闘い)をしました。

そして、ついに神と人に勝ったのです(28)。ここにはもはや、かつてのひ弱で自己本位のヤコブはいません。異国での長く苦しい労働と困難な人間関係を経て、忍耐強い逞しい人間になったヤコブがいます。見知らぬ人にしがみつき、一晩中「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と叫んで、大胆に神に肉迫していくのです。ついにヤコブは、ものの関節をはずされ、足腰が立たなくなりました。

「神との激しい格闘において、最後は神が勝利されました。そして、そこに祝福が与えられます。信仰の勝利、祈りの勝利とは、自分が神を屈服させることではなく、逆に、神に屈服させられることなのです。神を相手にして『勝つ』ことは、『負ける』ことなのです。このように、神に肉迫し、神に敗れ、神に克服されたとき、人は真の勝利を得、祝福を受けるのです」(『私たちの創世記』今橋朗著)。悪賢いヤコブ、この世に長けたヤコブ、肉の実力者ヤコブは、神の前に敗れ去りました。「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(ガラテヤ2・19～20)。

### 三、新しくされたヤコブ(27～28)

その人は、「あなたの名はなんと言いますか」と尋ねました。彼は「ヤコブです」と答えましたが、改めて自分が「ヤコブ」(押し退ける者、狡賢く人を欺く者)であることを思い起こさせました。神はそのヤコブに「あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい」と、新しい名を与えられました。名が新しくなるということです。それは「押しのける者」から、「神の皇太子」にまで引き上げられ、新しくされたヤコブのことです。先の旅で、「わたしは共にいる」と呼びかけられた神は、今や帰りの旅で、ヤコブを全くとらえ、変化させ、新しくしてくださいました。彼は再び経験した生ける神との出会いの場を、「ベニエル」(神の顔)と名付けました。その時、ヤボク川のほとりに朝日が昇りました。昨日までのヤコブの心の不安と恐れは消え、神と共なる雄々しい信仰の歩みが始まりました。

### 結論

古い自分が打ち砕かれ、キリストにある勝利に与つて、新しい自分とされましょう。



## 研究資料

(小平徳行)

ヤコブはラバンのもとでの長い苦闘から解放されたが、約束の地に帰るためにはエサウとの出会いを避けることはできない。ペテルやマハナウムでの経験にも関わらず、彼はエサウへの恐れを打ち消すことはできなかった。ヤコブ自身の性質が取り扱われる必要があった。

## テキスト

**22 ヤボク** ヨルダン川東側の支流。渡し 浅瀬で他の領土に出入りするための門の役割をし、軍事戦略的にも重要な場所。ヤコブにとってもここは大きな覚悟を必要とする門であった。ヤコブとその家族はどのようにヤボクの渡しを渡ったのか、いくつかの可能性が考えられる。22〜24節にかけて出来事が順序通り書かれているとすると、ヤコブは一度家族と渡って、また引き返して自分一人残ったのか、渡った後そこからさらに家族を行かせて、そこにヤコブ一人残ったとすることもできる。しかし、22節を全体の要約、そしてそれ以下を詳細の記述と見れば、先に家族だけ渡らせて、ヤコブが残って格闘し、その後ヤコブも渡ったと取ることができる。夜 夜の渡河

は危険であったが、少しでも早くエサウを迎える準備を整えておこうとしたのか、渡河の途中でエサウに襲われるのを恐れたのかも知れない。

**24 ヤコブはひとりあとに残った** 人生の重大な危機を迎え、解消できない不安ゆえに、切実に祈りの必要を感じ、神の前にひとりになるため。ひとりの人が、夜明けまで彼と組打ちした ただの人ではなく神の御使いであった(ホセア12・4参照)。「人」と言われているのは、ヤコブがするように理解したゆえ。この戦いは神の御使いが主導権を取ってなされたものである。ヤコブの祈り(9〜12)への答えであろう。組打ち 精神と肉体を含んだ闘い。肉体の激しい労力を伴う祈りの霊的な闘いであった。これは神の恵みを妨げる一切のものをヤコブから取り除こうとする神のご熱心の表れである。

**25 勝てないのを見て** 肉の努力をやめようとしなかった。神のお取り扱いに対するヤコブの抵抗である。ものつがいがいはずれた 神のみわざにあずかるためには生来の肉の力ではなく、神に与えられる力により頼む必要がある、神に打たれる必要があった。

**26 わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去ら**

せません 抵抗していたヤコブは、打たれてしがみついた。自己防衛の術<sup>すべ</sup>を捨て、神にすがりつくことは、祝福を受けるのにふさわしい態度である。

27 あなたの名は ヘブル人にとって名は実質を表す。ゆえに名を問われることは、自らが何者であるかの告白を求められること。ヤコブです これまでの彼の「押しつける者」としてのありかたの告白であり、自分自身を投げ出した姿である。

28 イスラエル 文字通りには「神は争われる」の意で、「神と人との、力を争って勝ったから」とは厳密には一致しない。ここには語源の説明によく見られる言葉の遊びが含まれている。この改名は、称賛のみならず、これ自体が祝福を意味し、この名が神と人（エサウやラバン）とに力を争って勝ったことを思い起こさせ、勝利への希望を抱かせるものである。特に、これからなされるエサウとの出会いが守られることの保証でもあった。

29 ここで名について答えないのは、名を示すことが啓示そのものであり、神の主権に属するゆえ。名を教えないというよりは、祝福することによって教えているともいえる。

31 ペニエル 「神の御顔」の意。わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている 旧約の人々は一般的に神を見れば死ぬとの恐れを持っていた（士師6・22、23、13・22参照）。神を見た者は死ぬはずなのに死ななかったことの驚きと、格闘を通して得た祝福のゆえの賛美が込められている。エサウと顔と顔を合せ、彼に受けいれられた時、ヤコブは、神の御顔を見て、なお生かされた経験と重なり合わせている（33・10）。

31 日は彼の上にのぼった ヤコブにとって新しい出発のための希望の光、信仰の喜びであった。歩くのが自由<sup>ゆい</sup>に この身体的状態はヤコブの霊的状态を象徴している。彼は主にしがみつく力しか持ち合わせない者とされた。これは神に取り扱われ、碎かれ、主の臨在を知った者の勝利に他ならない。「わたしが弱い時にこそ、わたしは強い」（Ⅱコリント12・10）。ヤコブは当初、贈り物でエサウをなだめてから顔を合せようと考えていたが（20）、この経験の後、彼は自ら先頭に立ってエサウと出会ったのである。

参考図書 10月4日分に加えて、F・B・マイヤー『神と格闘した人』（いのちのことば社）

## 聖書

マルコ7・14〜23

## タイトル

あなたもわたしも罪人！

## 暗唱聖句

人から出て来るもの、それが人をけがすのである。  
マルコ7・20

## 目標

人を汚す内面からの罪に気づき、十字架による赦しときよめを受ける。

## 導入

(松浦みち子)

「うんこドリル」を知ってる人いますか？ 子どもたちの間でとても人気のあるドリルです。漢字ドリル、計算ドリル、英語ドリル、幼稚園などの小さい子ども向けのドリルなど、色々な種類がありますよ。そのマークにうんこの形がついていて、子どもたちに大人気です。今まで勉強の嫌いだっただ子も、「うんこドリル」をとて面白がって喜んで勉強し、勉強がすすむという不思議なドリルでなんです。

## うんこは汚くない

わたしたちは、「うんこ」と聞いたとき、エッ、きつたなーい、くっさーい！ と思いますね。でも違うんです。「うんこは汚いものではありません」といった方がいま

す。今日はそんな不思議なお話をしましょう。

今から二千年も前のお話です。誰がそんなことを言ったのでしょうか？ ズバリ、神の子イエス様です。エッ、ほんとう？ ハイ、ほんとうです。

ある時、イエス様はユダヤの国のパリサイ人や律法学者など、昔からの神の律法を厳格に守る人たちとお話合いをしていました。この人たちは、誰よりも熱心に神様の教えや言い伝えを守ろうとする人たちです。しかし、その行いは神様のお心とは遠く離れていて、自分たちの考えに凝り固まり、信心深そうに口先で「神さま、神さま」とうやうやしく言うのですが、ただ無意味に神様を礼拝していたのです。

そんな人たちのことを指して、イエス様は人々に、「わたしはこれから言うことをよく聞いて悟りなさい」と、おっしゃいました。「すべて外から人の中にはいって、人を汚しうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人を汚すのである」と。

なぜなぞみたいですね。みんなは、わかりますか？ これはどういうことかと言うと「うんこは、汚くない」ということです。つまり、わたしたちは食事をしますね。

食べたものはどこにいくのでしょうか。口から食道をと  
おって胃の中にはいり、そこでよくこなされて腸にいき  
ます。腸では様々な栄養が取り込まれ、その残りのかす  
がうんことなって外に出てくるのです。ですから、外か  
ら人の中にはいるものは、わたしたち人間を生かす大切  
で清いものですから、その残りかすは決して汚いもので  
はありません。

### 中から出てくるものが汚い

ところが、「わたしたちの中から出てくるものが汚い  
のだ」とイエス様はおっしゃいました。食べ物はお腹  
の中にはいるだけですが、わたしたちの心から出てくる  
ものが人を汚すのだ、といわれるのです。人の心から何  
が出てくるのでしょうか。

悪い思いが出てくるのです。それがわたしたちを汚す  
のです。悪い行いや、盗み、ウソをついたり、だまし  
たり、ねたんだり、人の悪口をいったり、けなしたり、い  
ばったり、愚痴をいったり、いろいろなものが、人の心  
の中から出てきて、人を汚すのです。聖書は「この世に  
はひとりも正しい人はいない、すべての人は罪人だ」と  
ハッキリ書かれています。つまり、先生もみんなも誰も

が罪人なのです。そして「罪の支払う報酬は死である」  
(ローマ6・23)と記されているように、最後には、恐ろ  
しい地獄の死、永遠の死が待っています。どうしたらそ  
のような恐ろしい死から逃れることができるのでしょうか。  
か。一生懸命努力して、罪を犯さないように気をつけて  
生きることでしょうか。いいえ、それでは逃れられませ  
ん。けれど、ただ一つ死から逃れる方法があるのです。

### イエス・キリストの救い

それは、イエス様の十字架を信じることです。イエス  
様は神様のひとり子でしたが、わたしたち罪人の身代わ  
りとなって十字架にかかり死んでくださいました。十字  
架の上でわたしたちのために「父よ、彼らをおゆるしく  
ださい。彼らは何をしているのか、わからずにいるので  
す」ととりなしの祈りをしてください、「すべてが終わっ  
た」と言って救いの道を開いてくださったのです。です  
から、イエス様を信じるとき、わたしたちは罪ゆるされ  
て、永遠のいのちをいただくことができるのです。何と  
うれしいイエス様の救いでしょう。

♪どうしてわかるかな♪ (ホ61、ふ4、PW99)

# 聖書 マルコ7・14〜23 テーマ 人を汚す罪

## 序論

(宮澤清志)

イエスはパリサイ人、律法学者と何度も論争されました。彼らが自分たちの言い伝えに固執して、律法の本質を見失っていることがたくさんあったからです。

ここでは、食事の前に念入りに手を洗わない弟子たちのことが非難され、それに答える中で、何が人を汚すのか語られています。

## 一、人の外から入るもの

イエスは、〈外から人の中にはいつて、人をけがしうるものはない〉と教えられました。〈どんな食物でもきよいものとされた〉のです。この教えは、ユダヤ人にとっては驚きでした。ユダヤ人は汚れた食物を食べれば、そこから汚れが入ってくると考えていました。旧約聖書には、きよい食物と汚れた食物との区別が書かれていたからです。

日本にも、「朱に交われれば赤くなる」という考え方があ

ります。多くの人は、罪や汚れ、悪や過ちの原因を、その人の外側に見つけようとしています。

また、人は目に見える外側のことにとらわれて、その背後にある本質や、心の問題を見失いやすいものです。イエスはここで、心の内にこそ問題があることを示しておられるのです。

## 二、人から出てくるもの

イエスは、〈人の心の中から、悪い思いが出て来る〉と明言されました。人の心の内にある罪の問題を示されたのです。ここであげられている中では、〈貪欲〉〈欺き〉〈妬み〉〈高慢〉などの隣人に対する良くない思いが、心の中の問題であるのは、よくわかります。そして、〈不品行〉〈姦淫〉〈好色〉とあるような男女関係の不道徳も、心がきよければ起きてきません。さらに、〈盗み、殺人〉とあるような、重大犯罪とされる行動すらも、元は人の心が問題です。みんな人の心の内から出てくることです。

そもそも、人が神の前に立つときに、神が人の心を見られることは、旧約聖書でも知られていました(サムエル上16・7)。そして、イエスは山上の説教においても、

律法を心のレベルまで掘り下げ、心がきよいことが神の国に入る鍵だと教えられました（マタイ5・21～22、27～28）。

人の心の内にあるこの罪の解決こそが、神の目的であることを、イエスはすでに意識しておられたはずです。公生涯の始めから、イエスは自分の使命を自覚しておられました。十字架と復活を目指しておられました。だからこそ、ここで「聞いて悟るがよい」と強く呼びかけられたのです。

### 三、人を変えるもの

人の心の中にある悪を、人が取り除くことはできません。食物のように体の外に出て行くことはありませんし、自分で自分の心を変えることはできません。

人の心を造りかえる唯一のお方は、イエス・キリストです。イエスは人の心の中を見ることができるとお方です。誰も知り得ない、神だけが知り得る人の心の奥底をご覧になります。熱心に祈り、施しをし、敬虔に振舞うパリサイ人たちの心が、実は陰険で汚れに満ちていることを知っておられました。また、ナタナエルの心（ヨハネ1・47）も、サマリヤの女の悩み（ヨハネ4章）も、

ザアカイの孤独（ルカ19・2～10）も、ご存知でした。そして、イエスは人の心を取り扱われ、新しくし、神によつて生まれ変らせることがおできになるのです。イエスこそ真の救い主です。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」（1ヨハネ1・7）。十字架にかかられたイエス・キリストだけが、人の心の内側の問題を解決することができなのです。

### 結論

人の罪や汚れの問題は、外側から解決することはできません。また、人の努力や修養で心が造りかえられるわけではありません。でも、愛の神は、完全な解決の道を備えてくださいました。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」（1ヨハネ1・9）とあるとおりです。

イエス・キリストの十字架を信じ、神の御前に自分の心の内の罪を認めて、悔い改める者には、罪のゆるしときよめが与えられるのです。



## 研究資料

(宮澤清志)

本日の聖書箇所は「旧約聖書の食物規定」に関するイエスの教えである。イエスは、これらの問答を通して、外面的・儀式的規定よりも、人間の内側、心の状態の方がはるかに重要であり、儀式的形式的に律法を守るよりも、心において何を考え、何に従うかが重要であることを指し示しているのである。並行箇所としてはマタイ15・10〜20があるが、いくつかの点においてこのマルコの記事とは相違がある。その相違も含めてマタイの並行記事にも事前に目を留めておきたい。

## テキスト

**14 再び** 6節から13節まではイエスのユダヤ教当局者に対する教えの言葉であり、本節からは群衆への教えの言葉である。ここからイエスの言葉の聴き手は群衆となる。**聞いて悟るがよい** 文法的に、今のこの瞬間の出来事として求める言葉である。集中して聞くようにというイエスの思いを込めた言葉であらう。

**15 けがす** (ギ・コイノオー) 基本的意味は「共有する」という言葉である。しかし、そこから派生して「日常の、

世俗の、汚れた」という意味も併せ持つ。この箇所では、悪しきものは神が創造された自然の世界の中にあるのではなく、人間自身の内側にあるのであるということを示す。

**16** この節はいくつかの写本(古代の手書きの聖書)には欠けていることから、括弧に入れられている。

**17** この節からは、再び場面が転換する。前節までは群衆に対する教えであり、主はわざわざ群衆を呼び寄せて語られた(14)。しかし、イエスが語られた言葉を弟子たちが理解できなかったのか、弟子たちのほうからイエスに質問する。

**18・19** 「人の心の中にはいる」(19)「内部(心)から」

(23)とあるように、神との関係においては外的・物的なものではなく、心が決定的に重要であることを再び語る。

**イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた** マルコによるこの箇所の解説である。旧約聖書には

「食物に関する規定」(レビ11章)があり、ユダヤ人たちにとっては清い食物と汚れた食物とが明確に区別されていた。しかし、イエスは、このような区別は形式的な意味しかなく、食物自体が汚れているとは考えなかった。

それゆえこの箇所は、イエスによる旧約聖書の新しい理解が明らかにされている非常に重要な箇所なのである。

21〜23 ここから次の節までは、いわゆる「悪のリスト」とよばれるものである。この「悪のリスト」については、ほかにローマ1・29〜31、ガラテヤ5・19〜21、Iテモテ1・9〜10、IIテモテ3・2〜5等に見ることができ。この箇所の特徴として、全12個のリストのうち、前半の6個は複数形で書かれていることから、繰り返しされる行為、行為における悪について取り扱われており、後半の6個については単数形で書かれていることから悪徳のリストであろうと言われている。なお、このリストに先だって「悪い思い」を入れている。この「悪い思い」とは、これらの悪徳表に登場する諸悪の根源という意味である。**不品行** 22節の「姦淫」よりも幅の広い言葉で、あらゆる種類の不法な性的行為を指す。**姦淫** 結婚した夫婦が相手を裏切って不貞を働くこと。**貪欲** 神の中にはなく、物事の中に幸福を見出す人の心にある、所有の欲望であり、「単に金銭ばかりでなく、あらゆることにおいて、いつも自分のために隣人を犠牲にすることを意に介さない性質」と定義する学者もいる。**邪悪** 人や物

で積極的に悪を行うこと。**欺き** 人と人との関係を損ない、かつ教会員としての生活に対立する行為様式の一つ。**好色** 性的不摂生をも包含するところの、人間に内在する「より多くを求める性向」に基づく行為であり、「すべてのしつけを恨む心の傾向」である。**妬み**<sup>ねた</sup> 元来、ギリシャ語のほととの言葉では「悪い目」という意味の言葉である。この語は「魔法をかけるような目つきで悪意をもって人を見ることが」というような意味を持つ。**誹り** 新共同訳では「悪口」となっている。これが神に対する人の行為として用いられる場合は「冒瀆」となり、人間同士の場合には「そしり」「悪口」となる。**高慢** ギリシャ語の本来の意味は「自分自身を超えて示す」「みずからを上にする」となる。特に、表に出てこないような、心の奥底での態度を指すときに用いられる言葉である。**無分別** 新改訳聖書では「愚かさ」とあり、頭脳の「愚かさ」ではなく、道徳的にばかげた行為、愚行を行う者を意味するのである。

**参考図書** W・バークレー「新約聖書ギリシャ語精解」(日本基督教団出版局) 他



## 聖書

マルコ9・14～29

## タイトル

信じて祈ろう！

## 暗唱聖句

もしできれば、と言っのか。信する者には、どんな事でもできる。マルコ9・23

## 目標

全能の主に対する信仰を持って祈る者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんは、体調が悪くなり病院に行ったことがあるでしょう。診察してもらい、風邪であつたらたいいの病院の先生は「これは風邪ですね。暖かくしてゆっくり休んでくださいね。薬を出しておきます」と言われます。でも、「この先生の言うことは信用できない。薬なんて飲まなくても治るさ」と思い、お医者さんの言うことを信じないで薬を飲まなかつたら、風邪をこじらせてしまいます。私たちは病院の先生を信頼して、その先生の言われる通りに薬を飲んでゆっくりしていれば風邪は早くなおるのです。病院の先生を疑えば、治るものも治りません。そのように、もし、皆さんがイエス様を疑っていればイエス様の恵みや力を体験することはできないのです。

## イエス様は病の息子を救われた

今朝の箇所には、けがれた霊にとりつかれた息子が出てきます。けがれた霊によって、その息子は口がきけず、引き倒され、あわを吹き、歯をくいしばりからだをこわばらせていたのです。息子の父親は、何とかして欲しいと思って、最初は弟子たちに頼みました。でも、弟子たちには息子からけがれた霊を追出すことができなかったのです。しかし、イエス様はその息子を癒されたのです。父親も息子もイエス様によって救われました。

皆さんには、けがれた霊がないですか。けがれた霊は、悪霊であり罪ということが出来ます。皆さんの心を罪が支配しているなら、罪が皆さんを苦しめてしまうのです。そのような人生は、決して幸せとは言えません。イエス様は、あなたを不幸におとし入れる罪から救ってくださるお方です。

## イエス様の嘆き

イエス様によって救って頂くために、とても大切なことがあります。それは、イエス様を信じることです。イエス様だけがあなたを救うことができるお方だからです。イエス様は、信じる者だけにイエス様の力と恵みを

与えてくださるのです。

息子の父親は最初に、弟子たちの所へ息子を癒してもらうようにと連れて行きました。でも、彼らには息子を癒すことができませんでした。なぜなら、弟子たちには息子を癒されるイエス様に対する信仰が不十分だったからです。彼らは、イエス様の力を信じて祈ることをしませんでした。

弟子たちにつかりした父親は、直接イエス様の所に息子を連れて行きました。父親は、イエス様に息子の状態を話して「できますれば：助けてください」と言いました。するとイエス様は「もしできれば、と言うのか。信じる者には、どんな事でもできる」と言われたのです。父親も心の底から、イエス様が本当に息子を癒すことができるになると信じきれていなかったのです。

イエス様は、弟子たちの不信仰に対して「ああ、なんという不信仰な時代であろう」と嘆かれました。また、父親の不信仰に対しても嘆かれたのです。皆さんは、イエス様は、「いろいろな問題から自分を救ってくださいる方だ!」と、心から信じていますか? また、あなたの両親やお友たちを必ず救ってくださいると信じていますか?

## イエス様の願い

イエス様のすばらしい恵みと力は、イエス様を信じて祈る人を通して流れて行きます。弟子たちがけがれた霊を追い出すことができなかったのは、癒されるイエス様を信じて祈らなかったからです。イエス様は、弟子たちに祈りの大切さを教えました。

皆さんは、毎日お祈りをしているでしょう。どのような思いで祈っていますか? 「このお祈りは答えられないだろうなあ」とか「イエス様は、本当に祈りを聞いてくださるのだろうか」なんて、疑いながら祈っていませんか? もし、そうなら弟子たちや父親と一緒に。お祈りは、教会学校の先生が「お祈りしなさい」と言われるからするものではありません。また、お祈りはひとり言でもありません。皆さんのお祈りをイエス様は聞いてくださっています。また、イエス様は、皆さんに疑わないで祈って欲しいと願っておられます。

## まとめ

イエス様は、皆さんの真剣なお祈りを必要としておられます。信じて祈り続けましょう。

♪すばらしい主イエスのあい♡ (ホ131)

# 聖書 マルコ9・14～29 テーマ 不信仰を取り除く

## 序論

(福井文彦)

三人の弟子を伴い高い山に登られ、イエスは変貌へんぼうされ神の栄光が現されました。そのとき麓ふもとでは不信仰な出来事が起こっていました。以前に病をいやす権威を与えられていた弟子たちが、病をいやすことが出来ず、律法学者たちと論じ合っていたのです。そこへ下山して来られたイエスが病をいやされ、「このたぐいは祈りによる」と弟子たちに信仰による祈りについて教えられたのです。

## 一、悪霊につかれた息子

変貌を通して神の栄光を現されたイエスは、その後下山されました。そのとき、山の麓で大勢の群集に弟子たちが取り囲まれて、律法学者と論じているのに出会われたのです。それは、弟子たちが「口をきけなくする霊につかれている」息子をいやすことが出来ないために起こったことでした。

マタイ17・15では、父親が息子のことを「主よ、わたしの子をあわれんでください。てんかんで苦しんでおり

ます」と言っています。確かに、その症状はてんかんによく似ています。しかし22節によれば、この「霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました」。おそらく殺意のある悪質な霊であつたのでしょう。

聖書は、人間が神との正しい関係で生きている限り不死であつたと言っています。それにもかかわらず、サタンの誘惑により人間が神に反逆した結果、人間は死ぬ者となりました。そこに病気の根本原因があり、病気の背後に悪霊の働きがある場合もあります。しかも、「幼い時から」なので、本人も両親も非常に苦しんでいました。

## 二、無力な弟子たち

イエスが「何を論じているのか」とお尋ねになりました。すると、「それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださいるように願いましたが、できませんでした」と、この父親は悲しい報告をしました。弟子たちは不信仰のため病をいやすことができなかったのです。

弟子たちは、以前は悪霊を追出し、病をいやすことができたのに、このときは全く無力でした(6・7)。一方、律法学者たちは自分たちにその力がないのに、無益

な議論を弟子たちと戦わせていました。不信仰は人を無力にし、さらに外からの非難や批判に対して辛抱しんぼうできなくなつて無益な議論を引き起こすのです。

このような状況をお知りになつたイエスは「ああ、なんとこの不信仰の時代であろう」とその不信仰を嘆かれたのです。それは弟子たち、律法学者、群衆のすべてに對してであるが、特に弟子たちの不信仰に對してです。しかし、これは当時だけのことでなく、現代の私たちに對しても問われているのです（ルカ18・8、Ⅱコリント13・3）。

### 三、信仰による祈り

不信仰を嘆かれたイエスですが、〈その子をわたしの所に連れてきなさい〉と命じられました。すると父親は、〈しかしできませんれば、わたしどもをあわれんでお助けください〉とイエスに願つたのです。このとき、彼は〈できませんれば〉とイエスの力を問題にしたのです。するとイエスは〈もしできれば、と言うのか。信する者には、どんな事でもできる〉と言われました。イエスは、問題は「イエスの力」ではなく「父親の信仰」にあり、「信じる」かどうかにかかっていると指摘されたのです。

このことを聞いた父親は、〈信じます。不信仰なわたしを、お助けください〉と叫びました。この父親は〈信じます〉と言つておきながら、なお〈不信仰なわたし〉と言つてゐるのは不可解に思えるかもしれません。しかし、彼は〈不信仰〉な自分を徹底的に自覚したのです。

その信仰は、このお方はすべてのことをなさることができ、という信頼です。裏を返せば、このお方によらなければ何もできないという自覚、意識、確信、そして自己無能です。彼は〈わたしを、お助けください〉と自己の無力さを痛感しています。すなわち自己絶望、自分に頼まない、自己不信頼から来る「主への絶対信頼」の信仰です。

### 結論

自己の無能無力を常に自覚し、信仰が形式的習慣的なものにならないように警戒することです。さらに、〈もしできれば、言うのか。信する者には、どんな事でもできる〉と言われたイエスのお言葉に全信頼をおいて、神に祈る者となりましょう。そのとき、この子がいやされたと同じように、主は最もふさわしい解決を与えてくださるのです。

## 研究資料

(小平徳行)

変貌山の出来事の後、イエスと三人の弟子たちが山を降りてきた時のことである。弟子たちは、悪霊に取りつかれた子どもをいやすことができなかったが、イエスによっていやされた。本福音書ではこの出来事についてマタイやルカよりも詳細に記されている。

## テキスト

**14 論じ合っていた** 弟子たちと律法学者たちとの議論については、マルコだけが記している。不信仰は人を無力にし、無益な議論を引き起こすものである。

**15 非常に驚き** イエスの顔に変貌の時の栄光が残っていたからではないかという説や、イエスがだれも予期しない時に突然に、しかも必要としている好時期に現れたからかもしれないという説もあるが、推測の域を出ない。

**17 口をきけなくする霊** マタイは、父親が息子について「てんかん」であると言っていることを記録している（マタイ17・15）。しかし、マルコは医学的な病名よりも、背後にある悪霊の働きを強調している。てんかんである

ことより、悪霊の力のもとにあることが問題であった。

**18 お弟子たちに、…願いましたが、できませんでした** かつて弟子たちはイエスから、けがれた霊を制する権威が与えられたが（6・7）、今回その権威を発揮することができなかった。

**19 ああ、なんという不信仰な時代であろう** これは誰に對して言われたのだろうか。おそらく弟子たち、律法学者、群衆のすべてに對してであると思われるが、特に弟子たちの不信仰を嘆いたものであろう（マタイ17・20）。失敗の原因は不信仰にあった。その子をわたしの所に連れてきなさい イエスはこの問題を恐れずに引き受けた。私たちは他のどんな方法が役に立たなくても、いつもキリストのもとに行くことができるのである。

**22 霊はたびたび…殺そうとしました** 息子の病は悪霊に取りつかれて症状が慢性的に現れており、絶望的な状態といえた。この自己破壊的な行動は悪魔的な力によるものである。しかしできますれば これは、もしできるなら、という仮定の表現であり、ここに父親の疑い（イエスが息子を癒すことができるのかどうかという）が見られる。重い皮膚病にかかった人が「みこころでしたら、

きよめていただけるのですが」(1・40)と願ったことと対照的である。しかし、完全に信仰がなくなってしまうわけではなかった。

**23 もしできれば、と言うのか** イエスは父親の不徹底な信仰をいさめられた。信じるとは半信半疑ではない。**信ずる者には、どんな事でもできる** 神は全能であり、信じる者には神が働いてくださり、不可能を可能にしてくださる。解決のカギは信じることができるかどうかにある。このすばやい切り返しは父親に信仰のチャレンジを与えた。

**24 信じます。不信仰なわたしを、お助けください** ここに父親の精神的、霊的な状態が的確に表現されている。前半は信仰が、後半は不信仰が表明されており、論理的に矛盾しているように見えるが、ここに信仰の真髄があるといえる。信仰は自らの不信仰を認め、神に絶対の信頼を置くことである。**お助けください**(ギ)ボエーセイ 現在命令法が使われており、継続的な助けを求めている。22節の「お助けください」(ギ)ボエーサーソン)は不定過去命令法であり、即座の助けを求めている。信仰は絶えず助けられる必要がある。

**25 けがれた霊をしかって** これはイエスが通俗的な迷信を満足させるためではなく、明らかにこの息子の災いの原因として悪霊に言及している。**わたしがおまえに命じる** イエスは命じるだけでけがれた霊を追い出した。ここにイエスの権威がある。

**29 祈りよらなければ** 霊的な権威は人が手にして自由に用いることができるものではなく、ただ祈りを通して、神の全能の力に信頼することによるのである。弟子たちの無力の原因は祈りの欠如であった。写本によっては「祈りと断食によらなければ」となっているものもあるが、後代の付加であろう。しかし、断食は祈りの真剣さを表すものであり、実際、教会の歴史においてそのような祈りを通して神の御力が現わされたことは確かである。これを決して軽んじてはならない。弟子たちの無力は信仰の不足が原因である。主に信頼するところに祈りがある。

**参考図書** 山口昇「マルコの福音書」『新聖書注解・新約I』(いのちのつとめ社)、A. T. Robertson "Word Pictures in the New Testament Vol.1" (BROADMAN)



## 聖書

マルコ10・13〜16

## タイトル

素直な心で

## 暗唱聖句

だれでも幼な子のように神の国を受けい

れる者でなければ、そこにはいることは

決してできない。

マルコ10・15

## 目標

幼な子のような素直な信仰で信じる者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

「ここは、子どもが来るところではないから、あっちに行っていないさい！」と大人から言われたことがありますか？時々、大人が皆さんのような子どもを邪魔あつかいするようなことを言ってしまうことがあります。

でも、イエス様は違います。イエス様は、子どもが大好きでいつも受け入れてくださるお方です。

イエス様から素晴らしい祝福を頂きましょう。

## イエス様の所に連れて来られた幼な子

皆さんは、お父さんやお母さんから「ねえ、ゾウさんを見に動物園に行かない？」とか「今度、遊園地遊び

に行こうよ」と誘われて出かけたことがあるでしょう。

今日の個所には、大人たちが子どもたちを誘って、イエス様の側に連れてきたことが記されています。それは、イエス様にさわっていただくためでした。どうしても大人たちは、子どもたちをイエス様にさわっていただくうと思ったのでしょうか。それはイエス様に祝福を祈って頂くためでした。大人たちは、自分の子どもや近所の子どもたちに「イエス様に祈ってもらおう！」と声をかけて子どもたちを連れて来たのです。

今朝、皆さんは誰かに誘われて教会に来ましたか？なかにはお父さんやお母さんから「教会行くから、早く準備して！」なんて言われ、「教会か」とししぶる来た人がいるでしょうか。でも、お父さんやお母さんは、皆さんがイエス様の祝福を受けて欲しいと思って教会に連れてきてくれるのです。ぜひ、その事を知っておいてください。また、ひとりで教会に来ている人であっても、背後には天の父なる神様が働いてくださり、イエス様からの祝福を受けるように導いてくださっているのです。ですから、私たちは今日、ここに自分で来たのではなく、イエス様の祝福を受けるために連れて来られたのです。

## イエス様に喜ばれる幼な子

イエス様の側には、多くの子どもたちが連れて来られました。この光景を想像するだけで何だか楽しそうな雰囲気ですね。でも、それを良く思わない人たちがいたのです。それは弟子たちでした。彼らは子どもを連れてきた大人たちに「ここに子どもを連れて来てはいけない。早く帰しなさい」と大人たちを叱りました。弟子たちの叱る声を聞いて、子どもの中には泣き出す子もいたでしょう。また、大人たちは弟子の態度に納得が行かなかったでしょう。

その時、イエス様は怒って弟子たちに「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である」と言われました。イエス様は、弟子たちのように子どもを歓迎しない方ではなく、喜んで招いてくださる方なのです。

今も、イエス様は、ご自分の側に集まってくる皆さんを見て喜んでおられます。イエス様は、どうして皆さんのような子どもを喜ばれるのでしょうか。それは、子どもの心は素直だからです。皆さんは、素直にイエス様を救い主として信じているでしょう。そして、必ず天国へ

行けることも信じているでしょう。イエス様は、それを一番喜ばれるのです。

## イエス様から祝福を受ける幼な子

イエス様は、素直な子どもたちを自分のもとに引きよせ抱かれました。そして、彼らの頭の手をおいて祝福のお祈りをされたのです。子どもたちは、イエス様の優しさや温かさを肌で感じ、イエス様から来る大きな祝福を、イエス様から直接受けることができました。子どもたちの顔は、祝福に満たされて輝いていたことでしょう。

## まとめ

私たちも、イエス様に喜ばれる者にされて祝福を受けたいですね。イエス様は、素直にイエス様を信じ、天国に希望をもつて歩んで行く人を喜ばれます。そして、そのような人を素晴らしい祝福で満たしてくださるので、イエス様を素直な心で信じましょう。

♪こどもをまねく(子どもの友は) ♪

(こ48、こ改5、ホ7)



# 聖書 マルコ10・13～16 テーマ 幼子のような信仰

## 序論

(福井文彦)

イエスに祝福していただくために、人々が幼子をイエスのみもとに連れて来ました。ところが弟子たちは彼らをたしなめたのです。するとイエスはその弟子たちの態度に憤られました。そして幼子を抱き、手をおいて祝福されたのです。それは、神の国は子どもたちのものであること、また、幼子のような信仰が神の国にはいるために必要であることを教えるためでした。

## 一、イエスの<sup>あんじゅ</sup>按手と祝福を求めて

イエスの時代、ユダヤ社会では、著名なラビ(律法の教師)あるいは長老のところに、子どもを連れて行って祝福を求めるという一般的な習慣がありました。それで、イエスがパリサイ人との論争を終えて、家に戻られたあと、親たちは「イエスにさわっていただくために」子どもを連れてきたのです。その子どもたちは普通六歳未満で、イエスに祝福の祈りをしてもらうためでした。

〈ところが、弟子たちは彼らをたしなめた〉のです。

それは主があまりにも忙しかったからです。これ以上イエスを煩<sup>わづら</sup>わすことのないようにという配慮だったのです。しかも、わきまえがなく、神の国の福音などとても理解できない子どもたちが、なれなれしく主のところに来てはならないという思いもあったのでしょうか。

しかし弟子たちの心の中にあつたのは、子どもたちはイエスにわざわざ時間を割いてもらうような存在ではない、という子どもを軽視する思いです。幼子を重要な存在と見ていなかったのです。

## 二、イエスと子どもたち

子どもたちを玄関払いにした弟子たちを見て、イエスは憤って言われました。〈幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない〉と。弟子たちは以前にも、幼子が神の国において特別な存在であることをイエスから教えられていました(9・37)。しかし、それを何一つ理解していなかったのです。また、このように者をつまずかせることは、非常に厳しい神のさばきに値するもの(9・42)ですから、イエスの憤りは当然でした。

そのため、〈止めてはならない〉とありますが、弟子た

ちは、幼子がイエスの所に来ることを妨害したのです。弟子たちが、その与えられた弟子としての權威を濫用し、靈的感覚が鈍くなっていました。それでイエスは憤られたのです。

イエスは「わたしの所に来るままにしておきなさい」と命じられました。エルサレムに、すなわち十字架の死に向かわれるお方が、幼子との時間をもたれました。イエスは子どもたちに自分の精力と時間を費すことを喜ばれ、積極的に子どもたちを呼び寄せられたのです。

### 三、幼子のような信仰

そこで、イエスは「神の国はこのような者の国である」と言われたのです。ここで語られている「神の国」とは、神の支配のことです。また「このような者の国」というのは、幼子の特徴をさしています。そして、「だれでも幼子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」と言われました。

「幼な子のように」とは、子どもは純真無垢で罪がないということではありません。英語で言えば「childlike」です。「子どもらしい、率直な（ありのまま）、純真な、（神や人を）信頼する」と言う意味です。決して「childish」

の「子どもじみている、子どもっぽい、幼稚な」という意味ではありません。

それで、「幼な子のように」な者とは、無きに等しい者であり、自分には功績や、誇るべきものが全く無い者のことを意味しています（Ⅰコリント1：26～28）。ですから「幼な子のような信仰」とは、自分の業、力、業績、能力に頼るのではなく、ただただ単純に絶対的に神に依り頼む信仰なのです。

イエスは、神の国の受けいれ方が幼子のようにでなければ、決してそこにはいれないと言われました。それは神の国を自分への贈り物として、ただ喜んで受け取ることです。子どもは贈り物をそのまま喜んで受け取り、別にお返しなどを考えません。何かすばらしいことをしたので、もらうに値するとか、そのご褒美として贈り物をいただくとか、考えないのです。それは信仰と主の恵みによるのです。

### 結論

幼子たちが彼らの両親に全く信頼しているように、天の父である神に対して全く信頼する者が、神の支配にいられ、神の国の民となるのです。

## 研究資料

(小平徳行)

この箇所は、親が幼子を積極的にイエスに導くべきことを教える象徴的な出来事が記されている。また、代々の教会の児童教育への方向づけをも与えてきた。教会は神の祝福を子どもたちに積極的に与える使命がある。しかし、この出来事は大人に対して、神の国に入るためになくてはならない態度を教えるためのものである。

## テキスト

13 さわっていただく マタイ19・13では「手をおいて祈っていただくために」とあり、イエスに祝福の祈りをしてもらうためであった(16節)。ユダヤ社会では、子どもたちをラビや長老のところに連れて行き、神の祝福を祈ってもらうことはよく行われていた。当時、幼子の死亡率は高く、16歳になる前に、10人に6人は死んでしまったようである。悪から守られるようにと、イエスに祈ってもらおうと幼子を連れてきたのだろう。幼な子ら マルコとマタイでは〔ギ〕パイディオン、ルカでは〔ギ〕ブレフォスが使われている。前者は4、5歳ぐらいの子どもの指すが、後者は、乳児など、より小さな子どもを指す。ル

カ18・16、17では、前者も用いられており、両者を同義語と考えているか、もしくは、その場には様々な年齢の幼子たちがいたのかもしれない。弟子たちは彼らをたしなめた「たしなめる」〔ギ〕エピテマオーは怒りの感情を伴う強い非難を表わす。弟子たちにしてみれば、イエスが忙しかつたので、わずらわせないようにという配慮だったのかもしれないが、幼子を重要な存在と見ていなかったことは確かである。

14 イエスは憤り 「憤る」〔ギ〕アガナクテオーは深い感情を表す強い言葉で、マタイやルカの並行箇所にはなく、マルコだけがこのことを記している。イエスが憤られたのは、福音書ではここだけである。弟子たちは以前にも、幼子が神の国において特別な存在であることをイエスから教えられていたが(9・37)、それを何一つ理解していなかった。イエスは、ご自身を信じる小さい者をつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海に投げ込まれたほうがよいと言われた(9・42)。「小さい者」とは社会的地位の低い、取るに足りない者のことであるが、ここに幼子も含まれる。このような者をつまずかせることは、非常に厳しい神のさばきに値するのだ

から、イエスの憤りは当然である。止めてはならない「止める」(ギ)コリユオー)は「妨げる」「禁じる」などの意味がある。弟子たちは、幼子がイエスの所に来ることを妨害したのである。

15 よく聞いておくがよい イエスは十字架にかかることにより、救いのわざを完成させる時が近づいていることを意識され、厳肅に、神の国に入るのはどのような者であるかを語られた。幼な子のように神の国を受けいれる者 幼子のものであるとはどういうことだろうか。子どもじみていること(childish)と子どものものであること(childlike)は区別すべきであり、信仰にとつては後者が重要である。幼子のようにとは、純真無垢じゆんしんむくで罪がないというより、根本的には、弱く、無きに等しい者であり、自分には全く功績や、誇るべきものがないことを意味していると言える。そこから単純さ、つまり素直に神の言葉を聞いて受け入れる、神に絶対的に信頼するということがでてくる。特にここで強調されているのは、受け入れることである。「受け入れる」(ギ)デコマイ)は「与えられたものを」手で受け取る」という意味である。つまり、自分で獲得するというよりも、差し出されたもの

を素直に受け取るという意味合いがある。幼子が贈り物を当然のように受け取るように、神の国を受け入れる者が天国に入ることができるのである。決してできないこれが神の国に入る唯一の道であることを示している。幼子のようになることが、よりよいことというのではなく、これ以外に道はないということである。信じるとは幼子のように受け入れることである。

16 彼らを抱き 抱く(ギ)エナグカレゾマイ)は「腕の中に抱く」という意味合いがある。これは、牧者がその腕に小羊をいだき、携え行き、導かれる(イザヤ40・11)ことを思わせる。そしてそれは「永遠の腕」である(申命記33・27)。祝福された これは(ギ)カタ「上から」と(ギ)エウレゴ「祝福する」が組み合わされている。つまり、祭司や家長がしたような間接的なものでなく、神からの直接の祝福である。そして、「祝福する」は語源からすると「よいことを話す」という意味である。イエスは、神の豊かなご愛、恩恵、賜物をもって幼子を祝福された。イエスは祝福に満ち溢れたお方である(ローマ15・29)。

参考図書 10月25日分と同じ。

## 聖書

マルコ10・35〜45

タイトル  
暗唱聖句

仕える生き方  
人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。  
マルコ10・45  
仕える生き方を身につける。

## 目標

## 導入

(櫻井めぐみ)

イエス様の弟子のヤコブとヨハネ。この二人は大変おもしろい兄弟です。イエス様はこの二人を「雷の子」と呼んでいました。雷のようにカッカしやすい二人は、時々とんでもないことを言ってイエス様に叱られています。

## ヤコブとヨハネが願ったこと

イエス様が「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。二人はそう願いました。右と左に座るといのは、王座に着かれたイエス様の次に偉くなる、ということです。この二人は、他の十人の弟子を差し置いても自分たちが偉くなりたい、と思ったのです。イエス様は怒りはしま

せんでしたが、こう言って諭しました。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか。それに対して二人は簡単に「できます」と言ってしまった。しかし、イエス様が飲む杯を飲み、イエス様が受けるバプテスマを受けるとは、一体どういうことなのでしょうか。

## イエス様が受ける杯とバプテスマ

まず、イエス様が「栄光をお受けになるとき」とは、どういう時のことか考えてみましょう。それはイエス様が十字架につけられる時です。実はそれがイエス様の勝利の時なのです。だからイエス様が栄光をお受けになる時その右と左にいるというのは、イエス様の苦しみと共有するという意味なのです。また、イエス様の杯とバプテスマを受けるといことも同じことです。「杯」も「バプテスマ」もイエス様が罪人である私たちの代わりに、神のさばきを受けるといことを表しています。それを二人の弟子は、簡単に「できます」と答えました。しかしイエス様の弟子となるというのは、ただ偉い人になって権力を握り、毎日を思い通りに楽しく暮らすことを意

味するものではありません。神様を愛し仕え、そして人を愛して生きることが目標となるのです。

### 愛するということ

しかし、神を愛し人を愛して生きようとするれば、みんなはその中で傷ついたり、苦しい思いを必ず経験するはずです。でもその傷や苦しみこそ、イエス様が示してくださった愛の姿なのです。みんなには、イエス様のように愛に満ちた人になってほしいと思っています。誰よりも神様がそのように願っています。でも一つ、覚えておいてほしいことがあります。愛する人になりたいと願っても、心の痛みを味わったり傷つくことなしに、本当の意味で愛に満ちた人間にはなれないのです。神様はひとり子であるイエス様をこの世に送ってくださいました。それは一体何のためでしょう。それはイエス様が私たちの罪のために、十字架にかかって死ぬためです。私たちはそれをただ信じることによって、自分は罰を受けずにすんで、永遠の命をもつことができるのです。神様は十字架の苦しみと死によって、私たちに対する愛を示してくださいました。だから私たちもイエス様が教えられたように、その言葉に従って生きて行くのです。

### まとめ―仕えて生きる

最後にイエス様は、偉くなりたと思うなら、かえって仕える者となりなさいと言われています。自分で自分を偉く見せるのではなく、謙遜になって仕える生き方をしなさい。そういう生き方が実は最も偉いのだと言います。そもそもイエス様が来たのは、他人に仕えられ、権力者として力をふるうためではありませんでした。「多くの人のあがないとして、自分の命を与えるため」です。イエス様は十字架の死にまでも従い、私たちに命をも与えてくださいました。でも結果的にイエス様は、十字架にかかることによって罪と悪に勝利し、栄光をお受けになったのです。私たちはイエス様のように、誰かのために命を捨てることはなかなかできないかもしれない。でも、愛そうとする時に傷ついたり悲しい思いをするならば、その経験はとても大切なものです。イエス様もその痛みを味わわれました。イエス様について行くのは、苦しいことがないわけではありません。でも、ただ楽な人生よりも、もっとすばらしい生き方です。神様と人を愛し、仕える生き方をもって歩んで行きましょう。

♪栄光イエスにあれ♪（新聖歌165）



# 聖書 マルコ10・35〜45 テーマ 仕える生き方を身につける

## 序論

(宮澤清志)

イエスが三度目の十字架予告をされた直後、ヤコブとヨハネが願ひ事をしました。わざわざ母親同伴だったようです(マタイ20・20)。イエスが栄光の座に就かれるときには、右大臣席と左大臣席に就きたいというのです。イエスの十字架の意味を悟り、自分の使命を自覚するべき大事な時だとは気づいていません。神の国での自分の地位だけを求めている弟子たちでした。

## 一、弟子たちの願っていたこと

ヤコブとヨハネは、神の国で他の弟子たちより高い地位に就きたいと願いました。そして、それを聞いて憤慨した他の十人も、同じようなことを願っていました。十二弟子の全員が、お互いに妬みや競争心を持ち、互いを蹴落としても高い地位に就きたいと望んでいたのです。もちろん、弟子たちに信仰がなかったわけではありません。神を信じ、イエスを救い主と信じて従ってきたの

です。しかし、彼らにとっては、神の御旨の成就が一番ではなく、自分たちの将来の地位の方が重要だったので。三年以上もイエスと寝食を共にしてきても、十字架を目指すイエスを理解できなかった理由はそこにあるのです。

人が何を願うのかが、その人の生き方を決めていきます。神の御心に従って願うのか、自分の欲で願うのかは、その人の品性にも影響してきます。

## 二、弟子たちの目指すべきこと

「偉くなりたいと思う者は」と語られたイエスは、偉くならうと志すこと自体を否定されたとは言えませんが、ただ、神の国のリーダーの条件は、地上とは違うことを示されたのです。人に仕える者であることこそが大切であることを、教えられました。

実は、以前にも同じようなことがありました。二度目の十字架予告の時も、弟子たちは誰が一番偉いかと論じ合っていたのです。その時イエスは、神の国で重んじられる人について教えられました(9・33〜37)。ところが、肉に生きている弟子たちは、なかなか悟ることができません。ここで再び、神の国における真のリーダーの姿を、



徹底的に教えなければならなかったのです。

ヨセフ、モーセ、ヨシユア、ダビデなど、神が人を指導者として立てられる前には、その人をまず、しもべとして歩ませられました。そして、イエスこそ最も顕著な例として、栄光の座に就く前には、十字架への道を従い通されたのです。

これから弟子たちは、イエスがしもべとしての生涯を全うされる姿を見なければなりません。そして、そのキリストにならって人のしもべとなっていくことこそが、弟子たちの目指すべきことだったのです。

### 三、弟子たちに備えられた道

イエスが飲む杯、イエスが受けるバプテスマを受けることができるか答えた弟子たちですが、もちろん、その意味を理解していたわけではありません。十字架に向かってイエスにならって、自らも十字架の道を進む覚悟を決めているわけではありません。しかし、後に十二弟子のほとんどは殉教することになるのです。ヤコブも、殉教の死を遂げ（使徒12・2）、ヨハネはバトモスに流刑にされました（黙1・9）。

神の計画に逆らって、人間が自分の肉の計画を押し通

そうとすることはほど空しいことはありません。そして、神は、私たち一人一人にも素晴らしい計画を用意して下さっています。平安・将来・希望などの祝福こそが神の計画です（エレミヤ29・11）。しもべとしての道は、困難の多い狭い道に見えるかもしれませんが、また、滅びに至る広い道は、肉の欲・目の欲・持ち物の誇りを満たす魅力的な道に見えるでしょう。しかし、それが悪魔の策略なのです。

### 結論

神の国が地上と同じ原理であること、自分たちの願う制度であることを期待するのは愚かなことです。ところが、多くの人は自分に都合の良い基準で、神の国に入れると誤解しています。しかし、イエスの語られたこと、聖書に記されたことに従う以外に、本当の神の国に入ることはできません。

イエスが語られたように、仕える生き方をする者をこそ、神は重んじてくださるのです。私たちも、神と人に仕えることを目指していきましょう。

## 研究資料

(加藤 満)

イエスの三つの受難予告(8・31、9・31、10・33〔34〕と、弟子達が地位と名声を求める姿はコントラストを描いている。それは言い換えれば、ヤコブとヨハネに見る人間の自己本位、利己心の露骨な現れと、キリストの奉仕と自己犠牲による救済の明確なコントラストである。この兄弟達の排他的な要求の中で、イエスは神の国が力と支配に基づかず、奉仕と与えることに基づく事、またそれが、単なる神の国の倫理を指し示すものではなく、神の救済の方法である事を指し示すのである。イエスの弟子とされながら、事実世の国の価値観に仕える彼らの自己矛盾に、イエスは本来の姿を指し示す。

## テキスト

35 お頼みする：かなえて アオリスト時制。明快で強調的な要求のニュアンスがある。

37 右：左 右は王座の次席、権威の第二位。左は第三位。

38 あなたがたは自分が何を求めているのか、わかって

いない 導入で触れた通り、この個所の前に三度イエスの進む栄光の道は十字架であると語られている。弟子達がそれを理解していない事をイエスは指摘している。杯は旧約聖書においては喜びと成功などの象徴として登場する(詩篇16・5など)。しかし、しばしばそれは、神の裁きと怒りの象徴でもある(マルコ14・36)。イエスは受難予告において、十字架の死を預言しているが、その行為が人間の罪に対する神の怒りの杯を「飲む」行為である。バプテスマ バプテスマが比喻として使用される最初の例。バプテスマは罪人とイエス様の一致(共同体性)、と罪人に対する神の裁きをいとうことなく負おうとされる意志を現わしている(死と復活)。

39 あなたがたは：受けるであろう イエスは弟子達の応答を否定しない。これはヤコブとヨハネの将来を見て、そう言われたのかもしれない。ヤコブは12弟子で最初の殉教者となり(使徒12・1)、ヨハネは晩年にパトモス島への流刑に合っている(黙示録1・9)。

40 わたしのすることではなく 強調的表現。イエスの権威ではなく神の権威の内に進められていることの強調。神の目的を誰も邪魔をすることはできず。また完全

に理解することもできない。弟子達がイエスに従えない一つの理由は、彼らが既に、先に起こる事や、希望を描いているからである。

41 憤慨し出した 他の弟子達も同じ様な願いを持っていた事は驚くべき事ではない(9・34)。

42 治め(ギ)カタクリユーオー) (主権者として) 他者への支配力を得る。征服する。権力をふるっている(ギ)カテズーシアゾー) 他者への権力を行使する。

43 そうであってはならない be 動詞の現在形。即ち訓戒や振る舞いに限らず、存在そのものを指している。彼らは神の国の民であり、神の国の民として生きているのであるから、世の支配者の価値観と相いれない。偉くなりたいと思う者は、仕える人となり 神の国の価値観である。それは明確にこの世の価値観と逆転している。偉くなりたいと思う者(ギ)メーガス) この上ない。仕える人(ギ)ディアコノス) 給仕人。

44 かしら(ギ)プロートス) (地位的に) 最上位の、有力な。僕(ギ)ドウロス) 奴隷、(自由人の身分を持たず主人に所有される) しもべ。

45 仕えるため 神の国で最も優れているものは仕える

者である。仕える者は与える者であり、与えることは目に見える愛である。何より、与えることは神の本質の現れである。多くの人のあがないとして 直訳は「多くの人の代わりの身代金として」。この身代金は元来捕虜や奴隷の身代金を指している。自分の命を与えるためである キリストはこの自己犠牲による奉仕が神の国の原理であると示す。それだけでなく、この自己犠牲の奉仕こそ、世の権威ではなく、キリストにある神の権威の生き方のパターンであり、同時にそれは弟子達が習う事ができる生き方である事を示している(ローマ15・2-3)。

参考図書 J. R. EDWARDS 『THE GOSPEL ACCORDING TO MARK』 M. HEARY 『The Gospel of Mark』 L・ウィリアムズ『現代聖書註解 マルコによる福音書』、他。

## 聖書

マルコ10・46〜52

## タイトル

切なる信仰

## 暗唱聖句

行け、あなたの信仰があなたを救った。

マルコ10・52

## 目標

切なる信仰をもって祈り求める者となる。

## 導入

(櫻井めぐみ)

目の見えないバルテマイは、イエス様から「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられました。バルテマイは言いました。「見えるようになることです」。このバルテマイに自分のことを当てはめて考えてみましょう。もちろんみんなは目が見えるかもしれませんが、それでもいいです。イエス様はみんなに聞いています。「わたしに何をしてほしいのですか」。さあ、みんなは何と答えるでしょうか？

## バルテマイが願ったこと

この前に出て来たイエス様の弟子、ヤコブとヨハネも全く同じ質問をイエス様から受けました。「わたしに何をしてほしいのか」と。それに対して二人は、イエス様の次に偉い人間になりたい、ということと言ったのです。イエス

様はこう言って諭しました。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていない」と。人間はとにかくいろんなことを願うものですが、自分が本当は何を望んでいるのかよくわかっていないことがあります。たとえばさっきも、みんなはイエス様に何をしてほしいかという質問に何と答えましたか？ それは、本気で願っていることですか。

自分にとって本当に必要なことですか。それとも、ただのわがままだったりしませんか。逆に、自分が心から願っていることなのに、他の人からはわがままだと思われることもあるかもしれませんね。でも自分にとって本当の願いは何なのか、それを認めるのは、実はとても難しいことなんです。バルテマイは自分がどうなりたいかを知っていました。そう、「見えるようになること」です。でも、ここでよく考えてみてほしいんです。バルテマイはずっと目が見えなくて、その状態で過ごすことにもう慣れつこになっていました。目が見えない人にとって、見えるようになりたいと願うのは当然のことです。でも、医者の治療で治せるようなものならとくに見えているでしょう。人間にはどうすることもできなかったのです。本当は、こうしたいのに。こうなりたいたいの。でもどうしようもない。それは

無理だから、そこはもうあきらめて、違うものを求めよう。お金とか物とか。そう考えるのがふつうです。でも、バルテマイはそうではなかったのです。確かに彼は、「物乞い」をして生活をしていました。しかしイエス様に対して、お金や物をくださいとは言いませんでした。はつきりと、自分が「見えるようになること」を求めたのです。私たちの考えでは、「これは絶対にない、無理」と思っているようなことでも、神様にとっては「有り」なのです。それは神様だけができることです。バルテマイは自分の心からの願いを、人ではなくイエス様に求め、見えるようにしていただきました。

### あなたの信仰があなたを救った

しかし、最後にイエス様は不思議なことを言われました。「行け、あなたの信仰があなたを救った」です。目が見えるようにしていただいたはずなのに、「救った」とは一体どういうことでしょうか。

人間にはたくさんさんの願い事があります。でも実は一番大事なのは、この「救い」なのです。それは私たちのすべての願いにまさって最優先されなければならないことです。なぜなら、人は皆必ず死ぬからです。たとえ何かの病気に

なつて、それが治ったとしても、それでもいつか終わりがやつて来ます。あるいは、私たちの願いがすべてかなつて、人生を思い通りに生きられたとしても、必ず死ぬ時が来ます。みんなもそうです。でも、私たちのこの肉の体はいつ死んでいくけれど、イエス様を信じるなら永遠の命に生きることができるのです。だから、イエス様はバルテマイに言いました。「あなたの信仰があなたを救った」と。

### まとめ―切なる信仰をもって祈り求める

バルテマイは確かに、イエス様こそ自分を救う方だと信じて、まっすぐにイエス様ご自身に求めました。そしてバルテマイは救われ、でも、「見えるようになる」という願いにもちゃんと応えていただきました。イエス様は、みんなにも「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねています。それができるのは、救い主であるイエス様だけです。イエス様を信じましょう。そしてイエス様に素直に、まっすぐに祈り求めましょう。イエス様はその祈りを喜んでくださいます。

♪ 祈つてごらんよわかるから ♪ (新聖歌481)

# 聖書 マルコ10・46〜52

## テーマ 切なる信仰をもって祈り求める者となる

### 序論

(宮澤清志)

イエスが十字架を指してエルサレムに向かっている、緊張感の漂う時でした。しかし、ヤコブとヨハネが母親と一緒に、右大臣と左大臣を望んで、逆に、イエスに「仕える者」となるように諭されたように、弟子たちはまだまだ不信仰でした。

その頃、エリコの町で、バルテマイと呼ばれていた目の不自由な人が、イエスに目を開けてもらうという奇跡を経験しました。ルカによる福音書では、この出来事を、イエスがエリコに近付いて行った時のことと記録しています。つまり、バルテマイとイエス一行の出会いには二度あり、最初の時には群衆にさえぎられたが、最後の機会には、さらに懸命に求めて癒しの恵みに与ったということでしょう。

### 一、バルテマイの境遇

生まれつき目が見えなかったバルテマイには、これま

で多くの不自由さがあつたことでしょう。家族にも負担がかかったでしょうし、治療にお金を使ったかもしれない。しかも、律法の規定から、神殿での礼拝の恵みに与ることもできませんでした。そして、この時には道端に座つて物乞いをして暮らすようになってしまつていたのです。

そんなバルテマイにイエスのうわさが聞こえてきました。この方こそ約束のメシヤかも知れない。メシヤであるならば、自分の目を開き、救ってくれるに違いないと期待したのです。

多くの人は、自分の境遇につぶやき、自分の罪の言い訳にします。そこから立ち直れず、神を求めることもできません。バルテマイが、自分の置かれた境遇にもかかわらず、イエスを熱心に求めたことは素晴らしいことではす。

### 二、バルテマイの信仰

バルテマイが「ダビデの子」と呼びかけたのは驚くべきことです。それはメシヤの称号で、人々は「ナザレのイエス」と呼んでいたからです。また、「あわれんでください」という言葉も、彼の信仰の表れです。何ものにも

値しない欠けだらけのわが身に対する、メシヤの一方的なあわれみによって救われるという信仰です。イエスこそ約束のメシヤだと確信していました。盲目ではありましたが、彼はイエスの神髄を正しく見抜いていたのです。

だからこそ彼は、人々にさえぎられてもひるみませんでした。そして、イエスが呼んでくださると躍り上がって喜びます。イエスが何をして欲しいかたずねられると、〈見えるようになることです〉とメシヤの御業を期待しました。弟子たちの不信仰とは対照的に、この個所にはバルテマイの信仰が、鮮やかに描かれています。

キリストに何をして欲しいのか、それこそキリストを信じているというその人の信仰の真偽を明らかにします。旧約聖書に預言されている通り、メシヤは盲目の者の目を開くと期待して言い表したバルテマイは、本物の信仰者でした。

### 三、バルテマイの得たもの

バルテマイは救い主イエスに、信仰告白をするように導かれ、〈あなたの信仰があなたを救った〉と、その信仰を認められました。なんと幸いなことでしょう。そして、この後イエス一行について行ったバルテマイは、開

かれて間もなくのその目で、十字架を見ることになるのです。〈テマイの子、バルテマイ〉とその名が記されているのは、その後キリスト教会の中で、彼が主の証人として名を残していったからだと考えられます。

全財産である上着を捨てた彼が得たものは、キリストの証人としての道でした。早くに殉教したかどうかはわかりません。でも、イエスに目を開かれた者として、彼がキリスト者としての道を歩んだことは、疑う余地がありません。

### 結論

私たちも、イエスこそ真の救い主と信じて切に求める祈りをささげましょう。

イエスは、私たちにも〈わたしに何をしてほしいのか〉と、聞いて下さいます。「あなたは何を信じているのか」と問うて下さるのです。「私は、何の値打ちもありません。ただ、あわれんで下さい。私をつくりかえてください」と、謙遜・素直に祈って、イエスの歩まれた道に従っていきましょう。キリストの弟子としての新しい人生が開かれていきます。



## 研究資料

(加藤 満)

盲目のバルテマイの癒しは、イエスの関心と暖かさが表されている点でとてもユニークである。癒しの記事の中でも唯一バルテマイという名前も出されている。

10章全体がイエスの弟子というテーマを扱う中、この最後のバルテマイの応答は、イエスの弟子達が誤解し、為し得なかった応答(10・35〜45)と対比的に描かれている。イエスの弟子としての本来の応答である。

また、このテキストは段落から段落への梯子のような役割も果たしている。真の弟子がどのような者かを示し、同時に次の段落でテーマになる、「ダビデの子」の新たなイメージもここに反映されている。

## テキスト

**46 バルテマイ** バルテマイという名前はアラム語で「テマイの子」。共観福音書にこの出来事は示されている(マタイ20・29〜34、ルカ18・35〜43)。しかし、バルテマイという名はマルコのみ記されている。おそらくマルコ自身が目撃者だったことが理由であろう。**道ばたにす**

わっていた 直訳「道の傍らに」〔ギ〕バラ テーン ホドン〕は象徴的な位置。それは、様々な意味で彼が主流から外れている立場にある事を意味する。また、52節の「イエスに従っていった。」という言葉に対応している。

**47 ナザレのイエスだと聞いて** 「ナザレのイエス」という呼び名は、マルコにおけるイエスの最初の癒しで語られている(マルコ1・24)。その為、1章〜10章の一つの括りとして、この称号が呼ばれているのだらう。**ダビデの子イエスよ** サムエル下7・11〜14において、神はダビデの子孫より一つの王国を立てると約束された。それ故、ダビデの子という称号はユダヤ人の間で、ダビデの様な「敵に勝利する戦の王」とイメージされてきた。しかし、バルテマイはイエスを憐み深い癒し主として、ダビデの子と叫んでいる。エルサレム入城において、軍馬ではなくろばの子に乗られたのと同様に、イエスが何者であるかが表されているのである。

**48 彼はますます激しく叫びつづけた** 誰も黙らせる事のできない叫び。この激しい叫びを生んだのはおそらく、目の見えない人生へのバルテマイの絶望である。しかし、その絶望がイエスへの切なる信仰への戸口となつ

た。

49 イエスは立ちどまって イエスは確固たる歩みでエルサレムに向かっていたにもかかわらず(10・32)、全く貧しく、力無い者の叫びを受け入れ、招くためにその足を止められる。彼を呼べ 49節には3回「呼ぶ」という言葉が繰り返される。これはマルコ1章にある、弟子達の召命物語を想起させる。その為、この箇所は癒しの奇跡が中心ではなく、如何にしてバルテマイがイエスの弟子となったかが主要点である。

51 わたしに何をしてほしいのか 10・36と比較。先生元の言葉は「ラボニ」(ラビという呼びかけの強調形ヨハネ20・16など)。しばしばこの呼びかけは、神への祈りの呼びかけとして使用される。見えるようになることで、ゼベダイの兄弟と比較するなら、彼らの願いは並外れた自らの栄光である。しかしバルテマイは、ただ目が見えることを求めている。

52 あなたの信仰が バルテマイの信仰は不可能なことを成される神の力(10・27)への完全な信頼に貫かれていた。彼は自分の病を密かに胸に秘めていたのではない。本当に癒される事を望み、彼はその望みを執拗に、

はつきりと、誠実に言い表したのである。これは長血の女性への言葉(5・34)と重なる。

あなたを救った 「救う」(ギ)ソーゾー)は身体的な癒しと、霊的な救いと双方に訳され得る言葉であり、イエスの御業においてはそれが結ばれている。バルテマイは目が見えるようになっただけに留まらず、イエスに従う者とされた。イエスに従って行った 直訳は「彼はその道に同行した」。46節において、主流から外れ、「道の傍ら」にいた彼が、「道の上」を歩み始めたという表現において繋がっている。

参考図書 11月8日分と同じ。

## 聖書

使徒14・8～18

タイトル  
暗唱聖句収穫は神の恵み  
食物と喜びとで、あなたがたの心を満た  
すなど、いろいろのめぐみをお与えに  
なっているのである。 使徒14・17

## 目 標

日々の食物を与えてくださる神の恵みに  
感謝する。

## 導入

(土屋開夫)

皆さんは、朝、昼、晩、ご飯の前にちゃんと感謝のお祈りをしますか？ 私たちは、毎日、食べ物を与えて下さるのは父なる神様だと知っていますね。だから食事の前に、神様に感謝します。

ところが前にこんな事がありました。お昼にラーメン屋さんに入った時の事です。隣りのテーブルにどこかの家族が座りました。私はなにげなく様子を見ていました。「たぶんクリスチャンではなさそうだから、食事の前のお祈りはしないだろう。でも、『いただきます』ぐらいは言うのだろうな」と。ところが注文した物が届いた途端、誰も「いただきます」も言わず、ただ食べ始めた

のです！「この人たちは、目の前の食事を誰に感謝する事もなく、ただ食べるんだ！『いただきます』も言わずに！」と、驚きました。神様に感謝する事を知らないという事は、なんと恐ろしい事でしょう。まるで、ただエサを食べる動物のようです。

そうです。私たちは、神様の恵みによって生かされている、という事を決して忘れてはいけません。自分たちの力で生きているのではないのです。

## 私たちに与えられる恵み

さあ、ところで皆さんの一番好きな食べ物は何ですか？ フムフム、ラーメン、カレー、お寿司…。

じゃあ、好きな果物は何ですか？ フムフム…。ところで今、みんなが言ってくれたフルーツって、全部、手に持ちやすい大きさですね。リンゴ、ブドウ、バナナ…。色も形も違うけど、どれも手のひらサイズです。まるで最初から神様が私たちに「手に取って食べなさい」と言っておられるかのようです。

もし一つのりんごが、こーんなに（両手を大きく回す）大きかったら、持ち運ぶのも大変です。逆にゴマつぶぐ

らい小さかったら、いくら食べてもお腹いっぱいになりませんね。神様は、私たち人間がちょうど食べやすいように、これらのフルーツを造ってくださったのです。野菜だってそうですよ。キュウリもジャガイモも、料理しやすい大きさです。

今日のみ言葉を読んでみましょう。神様は「あなたのために天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである。」

私たちにとって「食べる」という事は大きな楽しみ、喜びですね。そして食べることで命が生かされます。逆に、食べないと死んでしまいます。私たちは、天国に行ってから天国のフルーツを「食べる」のです。なぜなら私たちは、神様の恵みによって「生かされる」存在だからです。

### いつも感謝しよう

イエス様が教えてくださった「主の祈り」で、「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」と祈りますね。これは「毎

日の食べ物を今日も与えてください」というお祈りですが、食べ物だけでなく、私たちは全てのものを神様からいただいています。この命も、体も、才能（賜物）も、家族も、友達も…ゼーんぶです。

だから、気がついた時には何でもいつでも神様に感謝しましょう！「神様、これに感謝します。あれも感謝します…」と。いつも神様に感謝している人は、心がますます恵みに満たされます。逆にいつも不満や文句ばかり言ってる人は、心がどんどん暗くなります。どっちがいいですか。

### 魂の大収穫

一番の感謝は、イエス様の十字架と復活のお陰で、信じる私たちに「永遠のいのち」が与えられた事です！私たちのようにイエス様を信じて「永遠のいのち」を得る人がたくさん起こされるように祈りましょう。それこそが、天国での大収穫です！

♪神さまといつもいっしょ♪（イン73）

# 聖書 使徒14・8～18 テーマ 収穫は神の恵み

## 序論

(石田高保)

私たちは何かに動かされて生きています。自分の信念、直面している問題、プレッシャー、痛ましい記憶、恐れ、など。人生に確固たる目的を持っていないと、自分を取り巻くものに縛られ、振り回され、満足のない空虚なものになってしまいます。

## 一、目的のあやふやな生き方

(1) 罪悪感に駆り立てられる。罪の赦しをじゅうぶん受け取れていないので、自分の過ちや罪を赦せない。そのため過去に縛られ、罪悪感に駆り立てられます。神から来る罪意識とは似て非なるもので、神を忘れている状態です。しかし自分を主にあつて赦すことによって、罪悪感から解放されます。

(2) 怒りに駆り立てられる。罪の赦しをじゅうぶん体験できないので、人を赦すことができず、怒りを溜め込み、黙り込んだり、爆発させたりして、人と自分を傷つけてしまいます。しかし主にあつて人を赦すことによって、

て、過去から自由になることができます。

(3) 受け入れられないという必要に駆り立てられる。それは神から義とされているという実感に乏しいからにほかなりません。家族や職場の上司、先生、友人などからどう思われるだろうかを気にし過ぎるため、自分を見失い、いつまでも不満足が付きまといまふ。人の評価を気にしている限り安らぎはありません。しかし神から主にあつて100%受け入れられていることがわかると、人の評価が気にならなくなります。

## 二、目的のはっきりした生き方

神によって目的をはっきりさせていただと、

(1) 人生に意味を見出す。神なしでは人生に意味を持つことはあり得ません。人間は神のイメージに造られました。人間でさえ、目的もなくモノを造ることはありません。私たちは意味と目的のある存在として神によって生かされているのです。しかも生まれたときから神は私たちひとりごとりに、その人にとって最高最善の計画を立ててくださいます。現在、自分の人生が望ましく思えなくても、諦めないで下さい。一般道路を走っていても、次のインターチェンジに入れば高速道路を走れる

ように、神さまに自分の人生をお任せすれば、神の祝福の計画に乗って生きることが出来ます。「わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」(エレミヤ29・11)。

(2) 人生がシンプルになる。神と人のために生きるという目的がはっきりすると、自分のなすべきことと、そうでないことははっきりしてきます。たとえば、情報の洪水の中で自分の必要を自覚しておかなければ、振り回されることになります。また出会うがままの人間関係を保とうとすると忙しさに疲れてきます。人の期待に応えていたらキリがありません。私たちは神の期待にこそ応えるべきです。それはまた私たちを守ることもあるのです。それで義理を欠くことがあっても、神の前に責められることはありません。ルカ10・41、42「あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである」とあるように、《あれもこれも》ではなく、《あれかこれか》であり、《選択と集中》です。「後のものを忘れ、前の

ものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(ペリピ3・13、14)。

(3) 永遠への準備がなされる。私たちはいずれ神の前に立ち、それぞれに見合った報酬を受けることになりました。「わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである……だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである」(ローマ14・10、12)。幸いにも神は、この審査に合格できるように、前もって質問を教えてくださいます。第一の質問は、あなたは、わたしのひとり子イエス・キリストに対して、どのような態度をとりましたか。主を受け入れたかどうかによって、どこで永遠を過ごすか決定します。第二の質問は、あなたはわたしが与えたものを、どのように活用しましたか。神が与えてくださったすべての賜物、チャンス、エネルギー、人間関係をどのように活用しましたか。この答えによって、永遠の世界でどんな仕事を任せられるかが決定するのです。

### 結論

人生の目的が与えられていることを感謝しましょう。

## 研究資料

(辻林和己)

使徒14章は、前の章から始まった「パウロの第一次伝道旅行」での出来事が記されている。ユダヤ人からの迫害によってアンテオケを追い出されたパウロとバルナバ(使徒13・50)は、そこから150キロほど南東にあるイコニオム(小アジアの南部にある)という町に行き、そのユダヤ人の会堂で福音を伝えた。その後、彼らはルステラとデルベの町に移動する。

## テキスト

8 ルステラ イコニオムの南40キロにある。

9 この人がパウロの語るのを聞いていたが、美しの門のところにいた生まれつき足の不自由な人は、「何かもらえるのだろうか」と期待して、ふたりに注目していた(3・5)が、この人はパウロの説教に耳を傾けていた。語られた言葉を通して彼の内に主イエスを神の御子と信じる信仰の種がまかれていた。いやされるほどの信仰が彼にあるのを認め、パウロはこの熱心に耳を傾ける男性の中に、彼の信仰の純粹さと真実さを見て取った。

10 彼はパウロの命令を素直に受け入れ、従った。その結果、癒された。踊り上がって「飛び上がって」(新改訳)。原文では「(直ちに)飛び上がる」という意味の動詞(ギ)ハロマイ)の不定過去形が用いられている。歩き出した。原語では動詞(ギ)ペリパテオー)の未完了形が使われている。歩き続けたことを意味している。

11 群衆はパウロのしたことを見て、群衆は起こった奇蹟がパウロ自身の力によるものと誤解した。そしてパウロとバルナバを神々の化身だと思った。

12 ゼウス ギリシャ神話の主神。ヘルメス ゼウスとマイヤの間に生まれた子で、神々の使者。群衆は年長者のバルナバをゼウスに、雄弁なパウロをヘルメスに見立てた。

14 自分の上着を引き裂き 神を汚す行為への怒りと嫌悪を示す。

15 あなたがたと同じような人間である 神は神であり、人は人である。その厳正な区別をあいまいにすることから偶像礼拝が生じる。愚にもつかぬもの 原語は形容詞(ギ)マタイオス)の名詞的用法。新改訳では「むなしなこと」、新共同訳では「偶像」と訳されている。天と



地と海と、…生ける神 パウロはまことの神が万物の創造主であることを語る。立ち帰るようにと、福音を説いている。「立ち帰り」は原語では(ギ)エピストレフォアの不定法が用いられている。Iテサロニケ1・9の「立ち帰り」とほぼ同じ意味で用いられている。伝道とは、偶像礼拝から離れ、生ける神に立ち帰れと、語り伝えることである。その悔い改めを可能にする唯一の道が主イエスの福音である。

16 神は過ぎ去った時代には… パウロは、この個所ではこれまでの時代における神の寛容を語る。アテネでの宣教におけるパウロの言葉を参照(使徒17・30)。

17 ご自分のことをあかししないでおられたわけではない この節の後半で、神がご自身の存在とその恵みを証明しておられることを具体的に示す。心を満たすなど、いろいろのめぐみをお与えになっているのである。雨や季節の変化も神の恵みであり、実りや食物、喜びで心を満たされる。それらも神のご慈愛とご配慮である。

ルステラでのこの説教は、人々に偶像礼拝から離れ、まことの神に立ち返らせるための警告であった。

18 こう言って、ふたりは、やっとのことで、…思い止

まらせた パウロとバルナバはようやくの思いで、興奮していた群衆をしずめることができた。ここでは出来事が短く記述されているが、実際には、もっと長い時間の中での言葉のやりとりや人々の動きがあったと考えられる。二人が「やっとのことで」いけにえを中止させたことから、この説教が本来の福音宣教(主イエスの十字架と復活を伝え、悔い改めと信仰に至らせる)ではなく、説教の中心は天地の創造主なる神、私たちに必要なものを与えて下さる恵みの神を証しすることであったことが伺える。

この説教に関しては別の解釈もある。I・H・マーシャルは、「この部分(主イエスの十字架や再臨)(上記括弧内は筆者補足)が省略されているからといって、パウロがこれについてまったく触れなかったとは言えない。…」と述べている(『使徒の働き』『ティンデル聖書注解』いのちのことば社 287頁)。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『新実用聖書注解』、斎藤篤実「使徒の働き」『新聖書注解 新約2』(以上いのちのことば社)、他

## 聖書

イザヤ9・1〜7

## タイトル

預言されたメシヤ誕生

## 暗唱聖句

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。  
イザヤ9・6

## 目標

私たちのために生まれた救い主を信じる。

## 導入

(土屋開夫)

今日からクリスマスを待ち望むアドベント(待降節)に入ります。ところでこのアドベントの時期には、よくこのイザヤ書が開かれます。聖書(特に旧約聖書)には「預言書」というのがたくさんあります。このイザヤ書も代表的な預言書のひとつです。そして、このイザヤ書には救い主(メシヤ)の預言が特にたくさん、また詳しく書かれています。

救い主(メシヤ)って誰のことですか? そうです。イエス様の事です! このイザヤ書を書いたイザヤさんは、なんと、実際にイエス様が馬小屋で生まれる約七百年も前に、イエス様の事を預言していたのです! スゴ

イですね。

でも、別にイザヤさんがスゴイわけではありません。イザヤさんに未来を見通す予知能力があったわけでもありません。本当の神様が、ご自分がしようとされている計画表を<sup>あらかじめ</sup>予めイザヤさんに教えられたのです。だから、聖書の預言の通りになるのは当たり前のことです。

## どんな赤ちゃん?

さて、では早速、そのイザヤ書の預言の言葉を見てみましょう。6節「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。」

「みどりご」って何でしょう? 新しい木の葉っぱは、明るい緑色でツヤツヤ、ピカピカしていますね。その新しい葉っぱのように、生まれたての赤ちゃんや幼な子のことを「みどりご」と言うのです。

でも、この6節の前半のみ言葉を読んだだけでは、「私たち人類のために男の子の赤ちゃんが与えられるのか。フーン、でもそれがどうしたと言うのだろう?」と思いますよね。でも、その続きを読むと不思議な事が書いてありますよ。

「まつりごとはその肩にあり」：「まつりごと」っていうのは政治のことです。簡単に言うと、その赤ちゃんはやがて国を治める王様になる、という事です。王様になる赤ちゃん！でも、まだ驚くほどではありません。王様になる赤ちゃんなんて、世界中にいっぱいいるのですから。

でも次です。「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。」

なんだか難しい言葉ですね。新しい新改訳聖書だと、もう少し分かりやすい言葉で書かれています。

「その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」

つまり、その王様になる赤ちゃんは「不思議な助言者」です。ちよつとやそつとの不思議ではありませんよ。本当の「不思議」というのは、人間の考えや理解を越えた、神様にしか出来ないことです。その「不思議」で私たち人間に生きる道を教えてくれる羊飼いのような方。

そして「力ある神」です。「ちよ、ちよ、ちよつと待ってくださいいっ。その男の子の赤ちゃんっていうのは、神

様なの？人間じゃないの？人間なのに神様？神様なのに人間？」そんな方がいるでしょうか？そんな方がいるとしたら、それは一人しかいませんね。そう、イエス様です！ここには「イエス様」の名前は出てきません。けれどもよく読むと、これはイエス様の事だ！とスグ分かるのです。

続いて「永遠の父、平和の君」。私たちをお父さんのように愛してくださり、本当の「平和」を与えてくださる王様です。

### まとめ

このように、救い主であるイエス様は、力ある神様なのに、私たちと同じように小さな赤ちゃんの姿で来てくださいました。それは羊飼いのように私たちを愛して導き、本当の「平和」、神様の「平和」を与えてくださるためなのです！

救い主イエス様のご降誕を心から感謝しましょう！

♪主イエス様いつもわたしと♪(PW8、イン12)

# 聖書 イザヤ9・1〜7 テーマ 預言されたメシヤ誕生

## 序論

(石田高保)

イエス様が古今東西の著名な人物と違うところは、その誕生が何百年も前から預言されていた点です。ガリラヤは都から遠く離れた田舎として蔑まれていました。しかしイエス様の育ったのも、おもに伝道した所も、そのガリラヤでした。ガリラヤからは預言者はないと考えられていたのですが、神はそこにイエス様を登場させ、光栄を与えられました。人間の思いを超えたところで神は働かれます。イエス様の生まれた時代、ユダヤはローマの属領として厳しく支配され、人々は暗闇の中で夜明けを待つように救い主を待ち望んでいました。いつか救い主が世に現れること、しかも男の子として生まれることを預言しています。イザヤはやがて来られる救い主は、どのようなお方なのかを、イザヤがイエス様誕生のおよそ750年前に預言しました。その方のご性質とは。

## 一、靈妙なる議士

「議士」(不思議な助言者・新改訳2017)とは、王の

右腕、知恵袋、顧問官です。私たちは自分ひとりでは解決できない場合、信頼の置ける人に相談することがあります。アメリカのビジネス界には《困った時は専門家に聞け》という不思議な格言があります。男はブライドが邪魔をしてなかなか人に相談ができないからこういう格言があるのでしよう。

私たちは困った事態に直面した時どうするでしょうか。まず第一に不思議な助言者であるイエス様に実情をありのまま申し上げましょう。私たちは主に対して自分の体裁を取り繕って、洗いだらい言わないことがあるかもしれません。しかしいくら弱音を吐いても大丈夫です。なにしろ私たちの問題を先刻ご承知ですから。それでイエス様からダメだしたりしません。「たといわたしたちの心に責められるようなことがあっても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであつて、すべてをご存じだからである」(イヨハネ3・20)、あなたのことをいちばんよくわかっている方がいつもあなたのそばにおられます。それだけでなく何でも打ち明けられる信仰の仲間を持ちましょう。人を通してもイエス様は語られます。

## 二、大能の神

似た表現として「全能の神」がありますが、ここでは《戦いに強い神、常勝將軍》という意味です。「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である」(詩篇24・8)。やがて人間となつて来られる救い主は、ずばり神であると言っています。(ミデアンの日になされたように折られたからだ)、これはギデオンの日に率いられた300人のイスラエルの精鋭が、400倍の12万人のミデアン軍を打ち破った故事が引き合いに出されています。私たちにとつての戦争とは何でしょうか。それは多くの場合、罪に引き込まうとする誘惑との戦いではないでしょうか。イエス様は地上の生涯において、大能の神として、あらゆる罪との誘惑に打ち勝ってくださいました。「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル2・18)、私たちも誘惑との戦いにおいて、大能の神であるイエス様に助けを求めましょう。

## 三、としえの父

《永遠に父であられる方》とも表現でき、いつでも父でいらつしやるという意味があります。イエス様は私たちに父のように関わってくださいます。私にとって父は、イザ

という時に腹が据わっていました。自分が右往左往している時でも、慰め、励まし、力づけてくれました。あなたのことを愛している人々もそのように関わってくれているのではないのでしょうか。私たちにとつてのイエス様は人間の父親をはるかにしのいで泰然自若、としえの岩として支えて下さり、「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である」と言つて下さいます(イザヤ41・10)。

## 四、平和の君

英語では《プリンス・オブ・ピース》、平和という名の皇太子。(すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、血にまみれた衣とは、火の燃えくさとなつて焼かれる)、イエス様は大能の神、戦いに強い神であるとともに、平和をもたらし神でもあります。まず私たちを神と和解させてくださり、神と平和な関係にしてくださいました。その平和を体験した私たちは、身の周りの人との平和を作り出すことができます。神から赦された人は、他の人を赦すことができるようにされています。また自分が傷つけた人に謝ることができるようにされています。平和をつくり出す人は神を見る、主の生き様の一端を体験するのです。

## 研究資料

(中島啓二)

神に背を向け、さばきを警告されても悔い改めず、かえって「神をのろ」(8・21)った北王国イスラエルは、領土の大半の喪失と捕囚という「暗黒に追いやられ」(8・22)た。イザヤの子らの名に込められた預言のうちの一つ「マヘル・シヤラル・ハシ・バズ(分捕物は素早く、獲物はさっと持ち去られる)」(8・1)が成就したのである。しかしそんな「暗やみ」(2)の中にもイザヤは「大いなる光」(2)を見ていた。預言の一つが成就したならば、「シヤル・ヤシユブ(残りの者は帰って来る)」(7・3)の方も必ず成就する。そう信じたであろう彼に、神は「インマヌエル」(7・14)に続く、新しいメシヤ像(6・7)をお示しになったのである。

## テキスト

1 **ゼブルンの地、ナフタリの地** これらの地(後述のメギドに該当)は、BC734〜732年のアッシリヤの侵入(列王下15・29他)で最大の打撃を受けた地域であった。すなわち反アッシリヤの動きを見せた北王国に対し、テグラテピレセルは、その地を含む北王国領土の大半をアッ

スリヤに併合し、一部住民を捕らえ移したのである。北王国に残されたのはサマリヤを中心とした丘陵地帯だけであった。アッシリヤに併合された地域は、ドル、ギルアデ、メギドという行政区に分けられ、そのそれぞれが**海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ**に該当する。マタイは、イエスのその地域での宣教活動が、預言の成就であることを示す(4・12〜17)。

2 **大いなる光** 第一義的にはアッシリヤの圧政からの国土と民の解放を意味するが、預言が究極的に指し示すものは、言うまでもなく罪の支配からの人類の解放と、その解放をもたらす救い主である。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(ヨハネ1・9)。見た**：照った** 預言者の完了と呼ばれ、預言書によく見られる。実際は将来のことであるが、預言者の目には既に起こったことのようにはつきり見えているのである。

4 **くびき** 発掘されたアッシリヤの碑文では、他国を征服することを「アシユル(アッシリヤの神)のくびきを課す」と表現している。**ミデアンの日** 10・26に「むかしミデアンびとをオレブの岩で撃たれた時」とあり、ギデオンの300人の精鋭による戦い(士師7章)を指すと



考えられる。それは人間の力によらず、神の力に徹底的により頼んだことから与えられた勝利であった。アッスリヤからの解放も、それが指し示す人類の救いも、全く神のみわざとして行われることなのである。

**5 歩兵のはいたくつ** アッスリヤ兵は革の編み上げ靴を装備していた。**血にまみれた衣** テイル・バルシブ遺跡の壁画によるとアッスリヤの軍服は赤だったようである。その色と戦いの悲惨さの両方を表現しているのかもしれない。軍靴や軍服が全て排除されることは、神の勝利が完全な平和をもたらすことを象徴的に示している。

**6 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた** 「おとめがみごもって男の子を産む」(7・14)と預言されている男の子を指す。その子は他でもなく、「われわれのために」お生まれになるのである。**靈妙なる議士** 「不思議な助言者」(新改訳2017)。古代オリエントでは王に助言を与える議官がいたが、この方は王であり同時に助言者であられる。言い換えれば助言者を必要としない王である。**大能の神** 救い主が神ご自身であるという驚くべき預言。**とこしえの父** 「父」は神のその民に対する関係を指す(詩103・13参照)。救い主は)自身の民に

とつてあわれみに満ちた保護者であられる。**平和の君** [ヘ]シャロームは平和の意で、健康、平安、健全、安全といった、欠けるところのない十全性を意味する。救い主はそのシャロームの状態を、神と人との間に樹立してくださる。するとそのシャロームが人と人との間、さらに個人の生活の中にも成立していくのである。

**7 ダビデの位に座して** 救い主はダビデの子孫として生まれるとエレミヤも預言した(23・5・6)。その通りイエスは、ダビデの末裔であるヨセフの子として誕生された(マタイ1・1)。**万軍の主の熱心がこれをなされるのである** 人間的な目で現実を見るならば、イスラエルの回復、さらにそれが指し示す人類の救いは実現不可能に思える。しかし神の率先と神の熱心によってなされるならば、必ず成就するのである。人間的な知恵や同盟に期待し、神により頼むことなく滅びを招いたことへの反省と警句でもある。「神には、なんでもできないことはありません」(ルカ1・37)。

**参考図書** 注解書 鍋谷堯爾(新聖書注解・旧約3)、J. Oswalt (NICOT), J. Watts (Word), その他 The IVP Bible Background Commentary: OT.



## 聖書

イザヤ40・27～31

## タイトル

主を待ち望もう！

## 暗唱聖句

主を待ち望む者は新たな力を得、  
 わしのように翼をはって、のぼることができる。  
 イザヤ40・31

## 目標

主を待ち望むことによる力を経験する。

## 導入

(松浦みち子)

アドベント第2週を迎えました。二〇二〇年は年の初めから人類が今まで経験したことのないコロナウイルスが発生し、またたく間に世界中を覆<sup>おほ</sup>いつくすという大変な年でした。世界中で、何十万人もの人がコロナウイルスによる病気で亡くなりました。日本でもたくさんの方が命を奪われる悲しい報告がされ続けました。皆さんの中には、卒業式も入学式もできなかった体験をしたお友だちがいることでしょうね。3密(①密接、②密集、③密閉)がいわれ、人に接する時は距離を開けなさい、集まっちゃいけない、閉めきったところにはいけない、と、という緊急事態宣言が出され、学校もお店も旅行も何もかも自粛するようにいわれました。教会でも礼拝

を自粛し、オンライン礼拝をしたり、お家で静かに聖書を読み祈って礼拝を守る、という今まで経験したことのないことが起こりました。また、子どもも大人もマスク姿で生活するようになりました。わたしたちは今、コロナウイルスという姿の見えない出口の見えない敵との戦いの中におかれています。

## イザヤの預言

今日学ぶのは、イザヤの預言の言葉です。イザヤはBC750年頃に活躍した預言者で、アモツの子としてエルサレムで生まれ、40年以上も活動した人です。

それではイザヤの生きた時代はどんなだったかを見てみましょう。イザヤはこう預言しています。「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。」(イザヤ9・2)

この言葉が示すように、その時代は明るく、希望に満ちた時代ではなく、暗くて、出口が見えない、希望のない時代であったようです。なぜかというと、戦争があり、BC722年には、イスラエル北王国はアссиリヤに滅ぼされてしまします。何とか南ユダ王国は守られたというものの、いつ戦争が起るかわからない恐れに人々の心は

傷ついていました。不安と苦しみの暗やみにある人々に、イザヤは光が照った、光が訪れたと預言をしたのです。

今の時代はどうでしょう。「暗やみの中を歩む人々」「暗黒の地に住む人々」はどこにいますでしょうか。今はテレビやインターネットを通し、瞬間的に世界中の出来事が目や耳に入る時代です。そこでは、民と民との争い、治療方法が分からない病気の発生と死の不安、地球温暖化による飢きん、地震、自然火災による山火事や害虫の発生など、数え切れないほどの困難の中にわたしたちは生きていることがわかります。そして人々は傷つき、孤独で不安の中に過ごしています。イザヤは時代を超えて、救い主誕生の預言をしているのです。「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた」（イザヤ9・6）と。

### 救い主を待ち望もう！

わたしたちも、救い主を待ち望もう！ どんなふう待ち望めばよいのかイザヤはたとえて人々に語りかけます。「皆さんはゆうゆうと空高く飛ぶ鷺を知っていますか？」と、人々の目を空高くに向けさせるのです。それまで人々は、目の前の事に心奪われ、「どうして神様は助

けてくれないのか、わたしの行く道は閉ざされて隠れているのか」と嘆きとつぶやきの中にいました。しかし、イザヤは、「あなたは知らないのか。聞いたことがないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造した方。疲れることなく、弱ることなく、その英知は測り知れない」と。そして「若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷺のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない」（イザヤ40・30～31、新改訳2017）と、語りました。鷺は鳥の仲間の王者で、大きいのは重さ8キロ、羽を広げると3メートル近くにもなります。鷺の子育ての様子が申命記32・11に「鷺が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように」（新改訳2017）と記されています。鷺は巢にいる若鳥に飛ぶことを促し、彼らを放り出して舞い降り、母鳥の翼の上に受けとめ、徐々に飛ぶことを教えます。そのように主を待ち望むなら、やがて鷺のように力強く翼を広げ、困難を乗り越えていけると人々を励ましました。すばらしい救い主を待ち望もう！

♪てんのひかり♪（ふ89）

# 聖書 イザヤ40・27～31 テーマ 主を待ち望む者の力

## 序論

(石田高保)

みなさんは「神さま」というとどのようなイメージを浮かべるでしょうか。

## 一、神さまへのイメージ

もちろん神さまは霊なる方で姿かたちがありませんから、どのようなイメージを浮かべたとしてもどれ一つ完璧なものはありません。それでもあえて浮かべるとしたらクリスチャンの数だけイメージがあることでしょう。それも無理のないことで、それぞれ神さまの付き合い方が違うからです。人とイメージが違うからといって間違っているのではなく、生い立ちや人間関係、人生経験、信仰のあり方、ほかのクリスチャンからの影響など様々な要因によって違いが出てくるのです。また信仰生活のステージが変わることによっても変わります。

河村従彦という牧師で臨床心理士の先生によると聖書には8つほどの神さまイメージ（あるいは役割）を描かれていますと言います（著書『神さまイメージ豊かさ再発

見』より）。それは創造者、王、啓示者、祭司、裁判官、父、贖い主、牧者、という具合です。以上およそ8つの神さまイメージがあるとすると、自分にはどのイメージが強いだろうかと考えてみるのも有益だと思います。一つだけでなく複数あるかもしれませんし、一度もイメージしたことのないものもあるかもしれません。どれが正解ということではなく、自分と神さまとの付き合い方を考えるときに助けとなると思います。

私の場合はクリスチャンになって長いあいだ、神さまは裁判官であり、王であったように思います。父とか牧者というイメージは神学的に理解していても実感は湧きませんでした。「天のお父さま」と呼びかけるのですが、心ここにあらずで口だけだったと思います。けれども弱さや失敗や罪の多い自分を神の子として無条件で受け入れられていることがわかるようになってから、父とか牧者というイメージに現実味を覚えるように変わってゆきました。こういう変化は経験上一瞬になされることはまれで、ほとんどの場合は少しずつしか起きないものです。たとえ一瞬にして変化したように思っても、それは一応のゴールであって、あくまでも次のステージへのスター

トにすぎません。「達し得たところに従って進むべきである」(ピリピ3・16)とあるようにゴールはスタートのためにあります。それでも神さまはイライラせずに私たちの遅々たる歩みに付き合ってくださいます。

## 二、創造主のイメージ

さて今日の個所でみなさんはどのような神さまイメージを浮かべるでしょうか。26節から創造主の姿が出てきます。宇宙には137億光年の直径があると言われていますが、天文学が発達するほど新しい発見に付随して謎が現れ神祕は深まるばかりです。神の創造世界は決して極めることはできないという事実の前にこうべを垂れるべきではないでしょうか。神さまは天体を一条乱れず運行せしめ、次の日食が何年何月何時何分何秒に起きるかも計測できるほどの驚異的な正確さで天地万物を統治しています。神さまの言いなりにならないのは人間だけで、それ以外の神羅万象は神さまの完全な統制下にあります。神さまは「弱ることなく、また疲れることなく」とあるように、人間とは違うのです。どんなにタフな人でも何日も飲まず食わず眠らないことはできません。しかし神さまは24時間365日不眠不休で働いています。そ

れは《いのちの源》であるからです。親が目を離れた隙に子どもが迷子になることがあります。神さまが私たちから目を離す隙は一瞬たりともありません。監視しているのでもなく、傍観しているのでもなく、可愛いあまりに目が離せないのです。

また神さまは天地万物を創造しただけでなく、それからこんにちに至るまで命を注ぎ続けています。(弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる)これは私たちの肉体をいやし強め力づけていることだけでなく、人間は霊的な存在で人格の中核にある霊に対しても同じです。この霊が神のことばによって強められることが生きる底力になります。世の中を見回すと人々は何と状況に振り回されて生活していることでしょうか。これを状況倫理と言います。私たちもうっかりすると神を忘れて相対的に生きやすいものです。しかし私たちにはこの世の価値観に迎合せず、聖書の価値観で判断し決断し行動する力が備えられています。

## 結論

長いものに巻かれるのではなく、健全な個人主義で生きる力を神さまから注がれていることを自覚しましょう。

## 研究資料

(辻林和己)

イザヤ6章に記されているように預言者として召命されたイザヤは、イスラエルの民にやがて来るさばきと滅亡を語り続けた。彼は民の罪を指摘し、悔い改めを迫った。それは当時の民が理解しえず、受け入れることができないものであり、彼らにとって「心をかたくなにするメッセージ」であった(イザヤ6・9～10)。39章でイザヤはバビロン捕囚の預言をヒゼキヤ王に語る(イザヤ39・5～8)。

しかし、40章は、「慰めよ、わが民を慰めよ」の神の言葉で始まり、ここから「慰めのメッセージ」と呼ばれる、捕囚の後にやがて起こる回復と救いの希望が語られている。

6～11節では、人間の弱さと神の言葉が対照され、神が慈愛に満ちた牧者として民を養われることを告げる(11)。

12～26節では、空しい偶像の神々と対比して、真の神がどのようなお方であるかが述べられる。

今回の箇所、27～31節では、創造主であり、全知全能

の神である主に対する信仰への招きが告げられている。

## テキスト

27 ヤコブよ ここではこの名前がイスラエルの民に対する呼びかけの言葉として用いられている。わが道は主に隠れている…わが訴えはわが神に顧みられない 私は神から遠く見放されている、訴えても神は聞いて下さらないという、民の神に対する不平を示す言葉。人間の心のかたくなさがこのようなつぶやきとなって表れている。それに対し、神は「何ゆえ」(新改訳では「なぜ」)(ヘラームマー)という疑問詞を伴う疑問形で、なぜそのように言うのかと、民に問うておられる。実際は、人の道が神の目から隠されているのではなく、神の道が彼の目から隠されているのである。それは、民の心が神から離れているゆえである。

28 知らなかったか…聞かなかったか イスラエルの民への神の問いかけ。主はとこしえの神、地の果の創造者イスラエルの神は永遠の神であり、天地のすべての創造者である。弱ることなく…その知恵ははかりがたい 神は力強い全知全能の神(26)。

29 力を与え…強さを増し加えられる 「力」(ヘコアツ

ハ)は神の属性であり、強さをもたらす力。それは一回限りのものではなく、絶えず人に与え続けられる力である。

### 31 しかし主を待ち望む者は ここでの主を「待ち望む」

(ハ)カーヴァー)は、主に信頼し、主を礼拝する、主に自分の全存在を委ねきって生きる等の意味が含まれている。新たな力を得 原文では力が「新しくされる」という意味の動詞(ハ)ハーラフ)が用いられている。それは「回復する、刷新する、更新する」という意味。繰り返し、勢いを回復し、力を刷新し、更新するゆえに「新しい力を得る」のである。わしのように「驚」(ハ)ネシャー)という言葉は、旧約聖書中26回用いられている。しかし、このことと同じ意味のたとえとして用いられているのは、詩篇103・5だけである。強く天に向かって羽ばたく驚が、神の力を受けて歩む信仰者のたとえとして用いられている。走っても疲れることなく…弱くことはない神に信頼する者には新しい力が与えられる、という約束が明言されている。

当時、アッシリヤの圧迫を切実に感じていたユダヤの人々にとって、イザヤの預言は大きな励ましとなった。

また、後年、バビロン捕囚という大きな苦難を経験するようになる人々にとって力強いメッセージとなったのである。イスラエルの民は、バビロンの地において、二代三代かけて主を待ち望んだ。やがて、ペルシヤ王クロスによるバビロン帝国の終焉、エルサレムへの帰還のときを迎える(BC 538年頃)。

そして、旧約時代のイスラエルの民は、救い主(メシヤ)の到来を待ち望んだ。

新約の恵みの時代においては、ここでの「力」は、聖霊による力と受け止めることができる。また、主を待ち望むとは、聖霊によって臨在される主イエスとのさらに深い交わりを待ち望むことであり、やがて来臨される神の御子、再臨の主を待ち望むことでもあらう(1テサロニケ1・9〜10、黙示録22・20等参照)。

主なる神を信じ待ち望む者は、新たな力に満たされることが出来るのである。

参考図書 服部嘉明「イザヤ書」『新実用聖書注解』、鍋

谷堯爾「創世記」『新聖書注解・旧約3』(以上いのちのことば社)、他



## 聖書

マタイ・18〜25

## タイトル

神様とマリヤを信じて

## 暗唱聖句

その名をイエスと名づけなさい。彼は、

おのれの民をそのもろもろの罪から救う

者となるからである。 マタイ・21

## 目標

救い主として誕生されたキリストにより、罪赦され、救いをいただく。

## 導入

(後藤 真)

みなさんはクリスマスが楽しみです。楽しみです。でもクリスマスが始まりは決して楽しい、わくわくするようなことではありませんでした。つらい試練の中から始まったのです。

## ヨセフの悩み

「どうしてこんなことになってしまったんだろう…」とヨセフは夜も寝られなくらい悩んでつらい気持ちでした。結婚の約束をしていたマリヤのお腹に赤ちゃんがいることがわかったのです。そしてその赤ちゃんのお父さんはヨセフではありませんでした。

聖書の時代、イスラエルでは結婚の約束をしたらだいたい一年たってから結婚式をして正式な夫婦になるということになっていました。ヨセフとマリヤは結婚の約束はしたけれど、まだ正式に夫婦になっていなかったのです。

ヨセフはマリヤのことを愛していました。だからマリヤに裏切られたのだと思って、ショックでした。それに、旧約聖書の教えでは、そのようなことをした人は石で打たれて殺される事になっていたのです。ヨセフはマリヤが厳しい罰を受けることも願っていませんでした。

「このことはまだみんなに知られていない。そうだが、こつそりマリヤと別れよう。そうすればマリヤは厳しい罰を受けなくてすむ」。優しいヨセフは、たくさん悩んで、そんなふうに心の中で決めたのです。

## 聖霊によって

けれども、そんなヨセフの夢に主の使いが現れて言いました。

「ダビデの子、ヨセフよ。心配しないでマリヤを妻として迎えなさい。マリヤのおなかの赤ちゃんは聖霊に



よって宿ったのだ。マリヤは男の子を生む。その子をイエスと名づけなさい。彼は自分の民をたくさんの方から救う者となるのだ」

旧約聖書のイザヤ書にこう預言されていたことが、そのとおりになったのです。

「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名前はインマヌエルと呼ばれる」

インマヌエルとは神様がわたしたちといっしょにいてくださるという意味です。

### マリヤを迎えたヨセフ

ヨセフは目が覚めるとマリヤを妻として迎えました。ヨセフは二つのことを信じたのです。一つは、神様は聖霊によってマリヤに赤ちゃんを与えることができる方だということです。人間には無理でも、神様にはできないことがない、ということです。

もう一つのこととは、マリヤは何も悪いことをしていないということです。マリヤもこんなことになってとても驚いたろうし、大変だっただろうなあとヨセフはマリヤのことを心配しただろうと思います。

まわりの人はいろいろな噂をするかもしれませんが。マリヤが聖霊によって赤ちゃんをみごもったと言っても、信じない人の方が多いかもしれません。でもヨセフはそういう大変さもぜんぶわかって、マリヤといっしょにそれを乗り越えていく決心をしたのです。なぜなら、生まれてくる男の子は、民を罪から救う人になるからです。

みなさんはクリスマスが楽しみです。楽しみですね。でも、クリスマスはただ楽しいイベントをする日ではありません。わたしたちを救うために、神様がイエス様を送ってくださったのです。ヨセフもマリヤも自分たちがたいへんになることを知っていたのに、イエス様を受け入れたのです。

罪をゆるしてくださるイエス様を待ち望んでクリスマスを迎えましょう。そして罪をゆるしてくださったイエス様のために何ができるかを考えてみましょう。

♪主イエス様いつも私とーインマヌエル♪ (PW8)

# 聖書 マタイ1・18〜25 テーマ ヨセフへの告知

序論

(小泉 創)

世界中で祝われるクリスマスですが、最初のクリスマスに続く道は、誰も関心をもたないところにいた人々―ヨセフとマリヤ―から始まります。小さな存在でしたが、人生をかけて神様に従おうとした彼らから、神様の大きなわざがすすめられていきました。

## 一、悩めるヨセフの心

マタイは福音書を始めるにあたって、まずイスラエルの系図を指し示し、神様が長い年月、愛と忍耐とをもって歴史を導いてこられたことを語っています。その系図の中には、神様に信頼して従った人々の名前も刻まれています。旧約聖書をひもとけば、私たちと同じように時に悩み、失敗もし、しかし神様に助けられながらその生涯を歩んでいった人々の姿が描かれています。

今、ひとりの信仰者の姿がここにあります。それはマリヤと結婚の約束をしているヨセフです。ヨセフは、正

しい人物でした。神様を愛し、神様のみところに従おうとしていました。彼はあるとき、マリヤの内に新しいいのちが宿っていることを知って悩みます。それは婚約者である自分には身に覚えの無い出来事なのです。愛するマリヤを疑い、律法に照らすなら厳しい罰を求めなければならぬことに悩み、どうすることが神様に従うことになるのかと身悶えして悩んでいます。すっきりした正解はどこにもありません。律法も、マリヤをも大切にするために、ひそかに離縁をしようと決心し、さらに思い悩んでいます。

そのようなヨセフのために、神様は夢を通してメッセージを与えられました。御使いはヨセフに語りかけます。「心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである」と。それはヨセフの考えてもいなかった道でした。

実はマリヤもまたヨセフを裏切るどころか、その身に救い主を宿すことを受け入れるほどに、神様を愛し、従っていたのです。神様はこの二人を選ばれて、豊かなみわざをなさそうとおられました。神様のなさることを、人は見極めることはできません。

## 二、救い主が来られる

御使いがヨセフに伝えたことは、マリヤを通してこの世界に、救い主が来て下さるということでした。イスラエルの人々が待ちわびていたお方がついに来られるのです。「彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる」(マタイ1・21)。

どのように文明が発展しても、人は変わりません。二千年前の人々と同じように、現代に生きている私たちの周りにも罪はあふれています。神様に逆らう傲慢がはびこり、人を人と思わない生き方が存在しています。そして私たちもその中に巻き込まれてしまうこともあります。

正しい神様は、罪ある人を滅ぼすためではなく、愛し、救うために救い主を送ってくださいます。罪を見逃すためではなく、報いを与えるためでもなく、罪の中に死んでいる者たちをゆるし、新しいものとして生かすためにイエス様を送ってくださいましたのです。神様は正しいお方であり、愛なるお方でもあります。イザヤを通して700年以上前に約束してくださったインマヌエル、「神われらと共にいます」という称号を持ったイエス・キリストが、

私たちのところに来てくださいました。

## 三、聴いて従う

ヨセフは夢から覚めると、神様が命じられたことに従い、マリヤを妻に迎えました。そしてこれから生まれてくる赤子をイエスと名付け、育てることを受け入れました。夢で聞いたことを、ヨセフは真実な神様が語られた言葉と信じたのです。それはマリヤと自分の生涯を、神様にささげるという決心でもありました。

神様に従う者を用いて、そのみわざは進んでいきます。弱く小さな存在、赤子としてこの世界に来て下さったキリストは、このふたりに委ねられました。それは分け隔てなくすべての人に救いの道を与えるための、神様からの大きな贈り物だったのです。

## 結論

私たちはこの年、どのようなクリスマスを迎えるのでしょうか。イエス・キリストという大きな贈り物をいただいた私たちも、神様の愛の呼びかけに応えて、自分身をおささげすることを心に決めましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

## テキスト

18 イエス・キリストの誕生の次第 「誕生」は〔ギ〕ゲネシス(起源、家系などの意も)。ちなみに1節の「系図」は「〔ギ〕ゲネシスの書(〔ギ〕ビブロス)」。その系図(1―17)の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。婚姻 いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係。夫、妻という表現はそのため。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に

一年ほどの期間を経て正式な結婚へと進む。その間に女性が他の男性と関係を持てば姦淫かんいんと見なされた(申命記22・23以下)。一緒にならない前に 正式な結婚へと進む前。聖霊によって身重になった 神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシスには「創世記」の意もあり、そのことが象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリヤの胎内になされたということである。天地創造のときと同じように、救いのわざなる新創造に際しても聖霊が働かれるのである。なお聖霊による受胎(18、20)の「」

によって」を表す前置詞〔ギ〕エクは、1―17節の系図においても、「ボアズはルツによるオベデの父」(5)のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことでは決していない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

19 正しい人であったので、彼女がことが公けになることを好まず 「正しい」〔ギ〕ディカイオス)は律法に対する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリヤの姦淫の容疑を世に明かし、彼女に裁きと処罰を受けさせねばならない(石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである)。ヨセフはマリヤをさらし者にしたくなかった。とはいえ明らかに有罪と思われるマリヤを妻に迎えるならば義が通らない。その葛藤の中で到達した答が、ひそかに離縁 すること。マリヤの同意さえあれば一人の証人の前で公式に

離縁することが可能であった。このようなヨセフの葛藤の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、慈しみに富んだ隣人に対する優しさとを同時に示すものであった。

20 **ダビデの子ヨセフ** 新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけである。

21 **その名をイエスと名づけなさい** イエス(ギ)イエスは、<sup>ハ</sup>イエシユア(ヨシユアの短縮形)のギリシャ語読み。おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる。その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は、政治的な救いであったが、イエスもたらす救いは「もろもろの罪から」の救いなのである。

22 **主が預言者によって言われたことの成就するため** 神が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシヤ預言には、それが第一義的に指し示すもの(ここでは、アハズに語られた当座の救い)と、究極的に指し示すものがある。その究極の約束が、今や成就するのである。

23 **おとめがみごもって** <sup>ギ</sup>パルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の<sup>ハ</sup>アルマは「若い女性」の意。よってイザヤの預言は処女降誕を意味するのではないと主張す

る者もあるが、その預言の究極の意味での成就を記すこの個所で<sup>ギ</sup>パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によるものと断言され(18、20)、さらにマリヤも「まだ夫がありません(直訳は、男の人を知りません)」(ルカ1・34)と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはつきりと指し示すものであると受け止めるのは当然である。インマヌエル 個人的な名ではなく、その役割を示す称号的なもの。神の御子が人となることによって「神われらと共にいます」という主の臨在が実現し、イエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章からインマヌエル(神の臨在)を語るこの福音書が、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(28・20)という臨在の宣言で締めくくられるのは偶然ではない。

25 **子が生れるまでは、彼女を知ることにはなかった** 「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いがないものとする。

**参考図書** 注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible)、増田誉雄(新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

## 聖書

マタイ2・1〜12

## タイトル

わたしたちの王、イエス様

## 暗唱聖句

ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。マタイ2・2

## 目標

キリストを王として心に迎える。

## 導入

(後藤 真)

今日はクリスマス。楽しいことがあるので、ついつい聖書のお話はうわの空になりそうになります。でもクリスマスとはキリストを礼拝するという意味です。まずイエス様を礼拝することを大切にしましょう。

## 東の博士たち

イエス様が生まれたのはヘロデ王がイスラエルを治めていたころでした。東の国からやってきた博士たちが、ヘロデ王を訪ねてやってきました。

「ユダヤ人の王としてお生まれになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、その方を拝みにきました」

東の国では、博士たちが星を調べて、国の大切なことを決めていました。そして星を調べていたら、イスラエ

ルに新しい王様が生まれることが分かったのです。博士たちは新しい王様になる子どもは、王様の家にいるに違いないと思い、ヘロデ王の宮殿のあるエルサレムにやってきました。

ヘロデ王はこの話を聞いてドキッとしました。そしてとても心配になりました。ヘロデはとても苦労して王様になったのです。自分の代わりに王様になる人が現れたら、自分は危ないと思ったのです。

ヘロデはあわててイスラエルの祭司長や学者たちを集めて、新しい王、救い主キリストはどこに生まれるのかを調べさせました。学者たちは旧約聖書から、救い主キリストはベツレヘムに生まれることを突き止めました。

そしてヘロデは、東の博士たちにいつ星が現れたのかを詳しく聞きました。そしてわたしも後から拝みに行くからその幼子のことを詳しく調べておいてほしいと伝えて博士たちを送り出しました。

## 礼拝

ベツレヘムは小さな村でしたが、その中からイエス様のいる家を見つけるのは大変です。でも、東の博士たちは、星に導かれてイエス様のいる家を見つけました。

トントン、とドアをたたき、博士たちは言いました。  
「わたしたちは東の国からやってきました。イスラエルの新しい王様を拝みに来ました。」

ドアを開けると立派な姿をした東の国の博士たちが立っていたのでマリヤはびっくりしたでしょう。そしてその博士たちは、まだハイハイかよちよち歩きの子の赤ちゃんイエス様の前にひれ伏して礼拝したのです。

博士たちは三つの贈り物を持ってきました。王様にささげる黄金。良い香りのする乳香。そして没薬。それはどれも値打ちのあるもので、王様にささげる贈り物にふさわしいものでした。

### イエス様を王様として迎える

博士たちは夢で「ヘロデのところに戻るな」と言われたので別の道から自分の国へ帰りました。そして、ヨセフの夢にも主の使いが現れて「ヘロデが幼な子を捜し出して、殺そうとしている」と教えたので、家族全員でエジプトに逃げました。ヘロデは博士たちに聞いた話から、新しい王様は二年のうちに生まれたと考えて、二歳より小さい男の子をみんな殺したのです。

博士たちは東の国の人でした。聖書のことともあまり知

らなかつたでしょう。でも、イエス様を新しい王様として礼拝しました。ヘロデやイスラエルの学者は聖書のことを知っていました。でもエルサレムからたつた8キロしか離れていないベツレヘムに、王様を拝みに行くことをしなかつたのです。ヘロデの願いは、いつまでも自分が王様でいることでした。

クリスマスは、わたしたちの王様となつてくださったイエス様を礼拝する日です。わたしたちは、ヘロデのような王様ではありません。でもイエス様を王様とするのは都合が悪いなあとと思うこともあるでしょう。イエス様の喜ぶことをするよりも、自分の願いをかなえるほうがいいと思うことがあるかもしれません。

きょう、クリスマスの日。もういちど自分の心を点検してみましよう。自分が王様になっていませんか。イエス様を王様としてお迎えし、イエス様に従う気持ちがありますか？

♪もろびとこぞりて♪

(こ28、こ改76、ホ30、イン24、新聖歌76)



# 聖書 マタイ2・1～12 テーマ 王なるキリストを迎える

## 序論

(小泉 創)

今やどこかに行くとき、ナビゲーションシステムを欠かすことができません。自分が今いる場所がわかり、どちらへ進めばよいかを教えてくれます。神様から遠く離れていた私たちが、いろいろな道筋を通りながら、今ここにいるのは、背後にあつて不思議な神様の導きがあつたからにほかなりません。今年のクリスマスも、ひとりでも多くの方がキリストのもとに導かれることを期待します。

## 一、期待と不安

東の国から博士たちの旅を導いてきたのは星でした。博士たちがどの国から来たのか、何人であつたのか、詳しいことについて聖書は沈黙しています。彼らは私たち異邦人の代表として、キリストのもとに導かれてきました。彼らはユダヤ人の王として生まれた方に出会うことに期待し、希望をもって旅をしてきました。

星に導かれてエルサレムにたどりついた博士たちは王宮に向かいます。ユダヤ人の王の誕生についてたずねた博士たちにキリストをはっきりと指し示したのは、神の民に与えられていた聖書の預言でした。

「ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう」(マタイ2・6)

せっかく聖書の言葉を与えられていたのに、エルサレムの人々は、靈的に鈍感になっていました。自分たちのすぐそばにキリストが来られたことを知っても喜びません。ヘロデは自分の地位をおびやかすキリストの出現に不安を感じています。彼は神の民の国の王とされていながら、神をおそれる気持ちはなく、自分が神のように扱われるのを望んでいました。そしてエルサレムの人々も残酷な偽りの王ヘロデの一挙手一投足に不安を感じるだけで、自分たちを救うために来て下さるキリストに期待することを忘れていました。神の民が目の前出来事にばかり気をとられ、神様のなさることに期待することを忘れてしまつて良いでしょうか。

## 二、ベツレヘムに來られる王

ベツレヘムはダビデ王の生まれた町です。そこにキリストが来て下さることを、律法学者たちは理解しました。本来は、神の民全員に告げ知らされるべきよき知らせは、ヘロデに伝えられました。ヘロデは東方の博士たちを「ひそかに」呼んで、博士たちから星の現れた日を聞き出し、キリストのいのちを奪うことをたくらみ、結果として無関係の多くのこどもたちのいのちが奪われました。神様を信じない世界で力をふるう人々は、自分の欲望のために人を利用することも、命を奪うこともためらいません。しかし弱く小さな者たちの嘆きの声を、神様は聞いて下さり、救い主を送ってくださいました。奪い取る王ではなく、自らの命さえも与え尽くしてくださいださる王が私たちのもとに来てくださったのです。

## 三、救い主への礼拝

星に導かれて異国の地にきた博士たちは、ベツレヘムでついにキリストと会うことができました。その喜びはいかばかりだったでしょう。きらびやかな王宮ではなく、暗く小さなところに生まれてくださった方から、新

しい時代が始まろうとしています。幼な子をひれ伏し拝み、携えてきた贈り物をささげました。それぞれの宝物はキリストがどのようなお方であるかをあらわしていると言われます。黄金は王であるキリスト、乳香は神であるキリスト、没薬は苦しみを受けてくださいさる救い主キリストです。

使命を果たした彼らを、神様は守ってくださいました。夢を通して、ヘロデのもとに行くことをとどめられたのです。博士たちはその導きに従って他の道をとおって、無事に自分たちの国に帰っていききました。博士たちはすべての人がキリストのもとに来るさきがけとなりました。

## 結論

私たちもキリストと出会うことがゆるされました。そればかりではなく、キリストの元にとどまり、キリストと共に歩むこともゆるされています。精一杯の礼拝をささげ、すべてをキリストのものとしていただきましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

東方の博士たちの出来事は、救いがユダヤ人だけでなく、全ての民に注がれる恵みだということを示す。

この場面には二人の王が登場する。この世の王ヘロデと、まことの王としてお生まれになったイエスである。自分の王位にしがみつき、まことの王を拒むヘロデと、まことの王の前にひれふす博士たち。この両者の正反対の姿が、この章の重要なポイントと言える。すなわち、この恵みをもたらす救い主を前にするとき、人は彼を受け入れるか否かで、自ずと二つに分けられるのである。

## テキスト

**1 ヘロデ王の代** ヘロデ大王は紀元前4年に没している。16節で「二歳以下の男の子を、ことごとく殺し」ていることから、イエスの誕生は紀元前5、6年頃と推測される。ちなみに西暦(紀元前「BC」)キリスト以前、紀元「AD」(主の年)は、ローマの神学者ディオニュシウスにより、キリストの誕生を基準にして6世紀に定められたが、その時代の知識が限定的であったことなどから、実際には数年のずれが生じたようである。**ユダヤの**

ベツレヘム エルサレムから約8キロ南。ダビデの故郷であり、「ダビデの町」(ルカ2・4)と呼ばれる。**東からきた博士たち** 「博士」(ギマゴス)は後に魔術師の意になるが、その時代にはその意味はなく、「天文に通じた」賢者の意であった。「東」はアラビヤ、ペルシャなど諸説あるが、大規模なユダヤ人社会が形成されていたバビロンが有力な候補である。いずれにしてもユダヤの宗教・文化が広く知られている地域であり、博士たちもその影響を受けていたのだろう。伝統的に3人とされるのは、贈り物が3種類であったことからの類推に過ぎない。**エルサレムに着いて** ユダヤの新しい王に会うのに、王宮のある都がふさわしいと博士たちが考えたのは、当然であろう。

**2 ユダヤ人の王** マタイでは他に受難記事(27章)であざけりの意で用いられるのみ。ヘロデが4節で「キリストは…」と言い換えているように、預言に基づいて待望されてきた「救い主」を指す表現。ただし、当時の救い主に対する期待は政治的なものであり、その期待が外れたゆえに、受難におけるあざけりにつながっていくのである。**その星** ハレー彗星(BC12年)であるとか、

794年に一度、金星と水星が魚座の中で接近する天文事象（BC7～6年）であるなどの説明があるが特定はできない。より大切なことは、自然現象であれ超自然的なことであれ、偶然ではなく神の導きによってなされたということである。そのかたを拝みにきました 「もろもろの王は彼の前にひれ伏し、もろもろの国民は彼に仕えるように」（詩篇72・11）との預言の成就と言える。彼らの明快な態度は、次節以降の人々と極めて対照的である。

3 ヘロデ王は…不安を感じた ヘロデはユダヤ人でなく（イドマヤ人）、ローマの後押しで王位を得たことから不人気であった。それゆえ預言に基づく救い主の誕生は脅威であったであろう。エルサレムの人々もみな…民の不安はヘロデのそれとは異なり、王が残酷な行動を起こすのではないかという恐れであったかもしれない。

4 祭司長たちと民の律法学者たち 彼らは旧約の預言に通じてはいたものの、それに対するふさわしい応答をすることができなかった。

5～6 ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない 「…小さい者だが」（ミカ5・2）が「決して最も小さいものではない

い」となっている。預言の成就に伴って、本来の意図が前面に出てきたと解釈して良いだろう。おまえの中からひとりの君が出て… サムエル下5・2の引用。

7～8 ヘロデはひそかに…わたしも拝みに行くから イエス殺害の意志を抱き、そのために博士らを利用しようとする策略家ぶりが表れている。

9 彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで…その上にとどまった 星がどのように動いたかは具体的に想像しにくい。より大切なことは、彼らを救い主探訪の旅にいざなった主が、最後まで確かな御手をもって導かれたと言うことである。

11 ひれ伏して拝み…黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた 古代東方において、贈り物は服従と忠誠を示す行為であった。教父たちやルターは、三つの贈り物に、イエスの王権（黄金）、神性（乳香）、受難（没薬）の意味を見いだす。

12 夢で…み告げを受けたので… 一切は徹頭徹尾、神の摂理によって導かれた。主の計画はこの世の王でさえ妨げることはできないのである。

参考図書 12月13日分と同じ。

## 聖書

詩篇118・1〜6

タイトル  
暗唱聖句

主に感謝しよう！

主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのい  
つくしみはとこしえに絶えることがな  
い。  
詩篇118・1

## 目 標

一年の恵みを覚え、神に感謝をささげる。

## 導入

(飯田勝彦)

もうすぐ二〇二〇年が終わります。今年は、皆さんにとつてどんな一年だったでしょうか？

今年は何と言ってもコロナのことがありました。私たちにとつて忘れることのできない出来事です。「ステイホーム」と言われ、外出が制限され街から人の姿がなくなりました。学校も長い間休校になりました。また、多くの方々が亡くなりました。

一見悲しいことに目を向けがちですが、この一年、神様に感謝できることは、どのようなことがありますか？「数えてみよ、主の恵み」とあります。この年が終わる数日、一年を振り返り、神様がくださった恵みを覚え、感謝しましょう。

## 神様に感謝できる恵み

この詩篇は神様への感謝が始まっています。そして、最後の29節も1節と同じ神様への感謝で終わっています。二〇二〇年元旦を思い出してください。皆さんは「神様、この一年を与えて下さって感謝します。今年も神様を信じ、あなたの守り中で過ごさせてください」と神様に感謝をもって始めたでしょう。そして、この一年の終わりを神様への感謝で終わるなら、まさにこの詩篇と同じではないでしょうか。感謝が始まり、感謝で終わる一年、感謝で始まり感謝で終わる一日。いつも神様への感謝がある人生つて、これほど素晴らしいことはないでしょう。「どんなことにも感謝しなさい」(1テサロニケ5・18、新共同訳ほか)とあります。生活には多くの悲しいことや辛いことはあります。でも、イエス様によつて救われている私たちは、悲しみや苦しみの中にあつても神様に感謝できる恵みが与えられています。気持ちがついてこない時でも「神様、感謝します！」と心を神様に向けて祈り、賛美してみてください。

### 神様が共にいてくださった恵み

今、一番の皆さんの味方は誰ですか？ その人を頭思い描いてみてください。「この人はどんなことがあってもわたしの味方になってくれる」という人がいることは嬉しいことです。そして、安心できますよね。

6節と7節を見ると「主がわたしに味方されるので：」とか「主はわたしに味方し：」とあります。この詩篇の著者にとって一番の味方は神様でした。神様が味方と言うことは、神様はいつも共にいてくださるという確信があったに違いありません。

皆さんはこの一年、神様が共に居てくださったことを実感できる経験はありましたか？ 聖書を神様の言葉として読めたこと、教会や家などで神様を礼拝できたこと、不安な時にお祈りが出来たこと、嫌なことや問題を乗り越えられたこと等々。それらはすべて神様が共にいてくださったから出来たことです。そう思うと、神様が共にいてくださった経験はこの一年たくさんあったのではないのでしょうか。共にいてくださった神様に感謝しましょう。

### 神様が救いとなってくださいました恵み

21節には「わたしはあなたに感謝します。あなたがわたしに答えて、わが救いとなられたことを」とあります。私たちは、神である救い主イエス様によって救われました。そして、今年も「イエス様は、わたしの救い主です」と告白し、賛美しながら歩めたことは素晴らしい恵みではないでしょうか。

神であるイエス様を救い主と信じ続けることができたことも大きな恵みです。

来年はどのようなことがあるかは、私たちは分かりません。でも、常に神様は私たちの救いとなってくださいます。このことを信じて神様に信頼して歩みましょう。

### まとめ

今年も残りわずかです。今日から今年が終わるまで何度も「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」と神様に感謝をささげましょう。

♪神さまかんしゃします♪（ホ119）



# 聖書 詩篇118・1～6 テーマ 恵みへの感謝

## 序論

(石田高保)

一年の終わりを感謝で締めくくることがクリスチャンにとってふさわしいことです。私たちは神の良くして下さったことを忘れず、心に刻みたいと思います。

## 一、なぜ感謝するのか

ここで繰り返される〈そのいつくしみはとこしえに絶えることがない〉という掛け合いの言葉は信仰告白となっています。神が私たちと結んで下さった救いの契約は、私たちがたとえ一時的に背を向けることがあっても、救いの契約のゆえに永遠に変わらぬ真実に貫かれています。言いかえればこっちが態度を変えたからといって、神は決して態度を変えないということです。きのうの神は今日の神であり、どこまでも真実をもって追い求めて下さる熱いお方なのです。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう」(詩篇23・6、新改訳・第三版)とあるとおりです。私たちはこれまで大小を問わず何度悩みの中を通過

きたことでしょう。アダムによって墮落した世界に生きている限り、生老病死の苦しみはクリスチャンであるからといって免れるわけではありません。祈ったからといってすぐに悩みから解放されるとも限りません。しかしやがてそれが取り去られるか、こちらが悩みを内的に克服するかしたときに、解放の喜びにあずかります。このときの心境が〈広い所に置かれた〉と表現されているでしょう。過去の悩みを振り返って、共に戦って下さった神への感謝がこの一節に込められています。

## 二、神との関係を感じる

また神が私たちの味方であるという霊的事実が謳うたわれています。〈主がわたしに味方されるので、恐れることはない〉。神が私たちに敵対する瞬間はまったくありません。その逆は無数にあるでしょうけれども。かといって神が私たちのすること為すこと何でも是認されるわけではありません。しかし私たちの人格は途切れなく尊重され続けています。神は私たちの悪い行いは憎まれますが、私たちそのものを憎むことはなさいません。その意味で神の愛が私たちに注がれ続けるのを止めることはできないのです。その愛の泉が湧き上がるのを私たちは決



して押さえつけることもできません。もし神が自分を敵視しておられるように感じるとしたら、それはとんでもない勘違いです。それは自分を不必要に責めているか、自分で自分を赦していないのかもしれませんが。「もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか」(ローマ8・31)とあるように、主の十字架のゆえに神との間に和解は成就しているのです。

### 三、すべての事を感謝する

「すべての事について、感謝しなさい」(エテサロニケ5・18)と言われていますが、これを実行すれば私たちの霊は健やかになり、奮い立たせられます。「すべて」の中には大感謝もあり、ちょっとした感謝もあり、にわかには感謝しがたい出来事もあるでしょう。むしろちょっとした良い変化について感謝することのほうが、ますます神により頼む心を育むのではないでしょうか。小さいと見えることに感謝すればするほど、ゆくゆくは「すべての事について感謝」することにつながってゆきます。「すべて」とは例外なくという意味です。小さい変化を喜べない人は、大きな変化を期待することはできないのかもしれませんが。

さらなる感謝の達人は、まだ起きていない出来事について感謝してしまします。その最たるモデルはイエス様で、ラザロの墓の前で「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します」と祈っておられます(ヨハネ11・41)。もし何も起きなかつたらどうしようなどと心配している気配は微塵もありません。すでに叶えられたと受け取っておられます。先取りの信仰とか、領収証の祈りとか言われるものです。それは神の子だからできたので、私たち凡人にはできないなどと言ってはいけません。なぜなら主は「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」と確約しておられるからです(マルコ11・24)。文語訳では「得たりと信ぜよ、さらば得べし」と訳出しています。原則としてイエス様にできたことは私たちにでもできるというのが聖書的な信仰の基準です。

### 結論

年末にあたり、感謝なことを書き出してはどうでしょうか。また家族や信仰の友と感謝を分かち合ってはどうか。きっと喜びは倍になることでしょう。

## 研究資料

(金井由嗣)

## 背景

詩篇113～118篇はユダヤ人の間では「エジプトのハレル」と呼ばれ、出エジプトを記念する過越の食事の前後に歌われる習慣がある。過越はユダヤでは新年祭を兼ねているため、年の変わり目に一年間の恵みを覚えてこの詩篇を読むことはふさわしいと言えよう。主イエスと弟子たちが最後の晩餐の後、オリブ山（ゲツセマネ）に歩いて行く時に歌った賛美（マタイ26・30）はこの詩篇だったと思われる（鍋谷）。本来は神殿礼拝に向かう道すら歌い交わしたものであろう（19～20、26～27）。

## 構造

1～4節は会衆が共に歌う祭儀的な感謝の歌、5～7節はそれを承けた個人の感謝の歌である。別々の詩ではなく、一般論としての民衆の信仰告白と個人の信仰体験が交互に語られる視点の転換のリズムがこの詩の基本構造をなしている（この後の部分も同じ）。

## テキスト

1 主に感謝せよ 感謝の詩篇の歌い出し。106、107、136

篇にもみられる。感謝（する）（ヘヤーダー）は「ほめたたえる」（ヘハーラル）と比較すると「はっきりと言いつけ、告白する」という意味合いが強い（TWOT）。「主に感謝を言い表せ」と訳するのが適切。主は恵みふかく直訳は「（主は）良い」。理由または強調を表す接続詞（ヘ）キが付いている。七十人訳、ルター訳など多くの欧米訳は理由を表す接続詞で訳しているが、新改訳2017と聖書協会共同訳は「まことに」と強調で訳す。「恵み深い」という訳はルター訳の影響か。優れた意訳といえる。新共同訳が「恵み深い主に」と簡潔に訳するのはやや強引だが、原文のリズムを生かすことには成功している。そのいづくしみはとこしえに こころも接続詞（ヘ）キでつながっている。1～4節においてこの後半部分が主題として繰り返し強調されている。この場合の（ヘ）キは英語の *and* にあたり、「感謝を言い表す」「言う」の内容を指示する従属接続詞である。1節だけは理由を表す接続詞と取ることも可能である。いづくしみ（ヘ）ヘセド は契約において変わらない神の真実を表す、旧約思想においてきわめて重要な概念。絶えることがない 原文の意味を補った意訳。

2と4 イスラエルは…アロンの家は…主をおそれる者は言え イスラエルの会衆、祭司とレビ人、異邦人の改宗者の3グループに指揮者が呼びかけ、それぞれが「そのいづくしみはとこしえに」と交唱する賛美の情景を想定することも可能だが（ヴァイザー、レスリー）、むしろ三者を重ね合わせることで全会衆に呼びかけていると理解した方がよい（石黒）。なおそれぞれに呼びかけの言葉〔ヘ〕ナーが付されているので、新改訳や聖書協会共同訳のように「さあ、よ」と訳した方が原文のニュアンスに近くなる。

5 わたしが悩みのなかから主を呼ぶと ここから主語が「わたし」に変わる。4節までに歌われた主への信仰が人生の具体的な現実（悩み）の中で試され、実証されたことを証しているのである。主語が一人称の部分では主の名（ヤハウエ）の短縮形〔ヘ〕ヤハが好んで用いられている（5、14、17、18、19）。一般論の信仰では済まされない苦難の中で個人的・人格的な神との交わりを経験していくのであり、その経験が共同体の信仰に（証しと賛美を通して）還元され、民全体の信仰体験として共有されていくのである。主は答えて この「主」も短縮

形「ヤハ」。呼びかけに答えてくださる人格的關係がよく表現されている。広い所に 「悩み」〔ヘ〕メーツアルの語源は「狭い」〔ヘ〕ツアル。苦難の中で縮こまった心の状態をよく表している。それゆえ、そこから解放された状態は「広い所」〔ヘ〕メルハープと表現されるのである。「悩み」には定冠詞がついており、詩人の具体的な体験であったことが示されている。

6 主がわたしに味方されるので、恐れることはない 直訳は「主はわたしのもの（または「わたしの側に」）。わたしは恐れない」となる。23・1「主はわたしの羊飼。わたしは乏しいことがない」と同じ構文である。人はわたしに何をなし得ようか この節の前半と後半に同じ目的語「わたしに」〔ヘ〕リーが配されることによって、主語「主が」と「人は」の対比が明瞭になる。「主が」ともにえられるなら、「人が」信仰者に手出しをすることは不可能なのである。「人」に〔ヘ〕アーダームを用いることによって、神との対比がより明確になっている。

参考図書 鍋谷堯爾『詩篇を味わうⅢ』、石黒則年（新聖書講解シリーズ）、A. Weiser (OTL), E. A. Leslie (Word), Theological Wordbook of the Old Testament.

# 牧羊ひろば



徳島栄光教会

## ●はじめに

私どもの教会では、教会学校は行っておりません。けれども新型コロナウイルスが蔓延するまでの徳島栄光教会には、ほぼ毎日、子どもたちの嬌声があふれていました。子どもに対する宣教の働きが、3つのアウトリーチミニストーリーと3つの日曜のプログラム、5つの年間行事で行われていたからです。



モンテッソーリ学習室

## I. アウトリーチミニストーリー

信徒の賜物を用いて、子どもに仕える働きです。特に子どもを徳を高める益（人格的成長）を図ります。

## ●モンテッソーリ親子学習室

毎週火曜日と金曜日の午前10時～12時まで、2歳～幼稚園入園までの子どもと親と一緒に教育館に来て、モンテッソーリ教材を用いて、お仕事をします。日常生活、感覚器、算数、言語の訓練をお仕事と呼びます。着衣枠にボタンやファスナーが留めてあって、それを開け閉めするとか、大きなコップから小さなコップに水を移すなど数十種類のお仕事があります。このモンテッソーリ法によるお仕事は、人格教育に用います。子どもが、自分はあるのままで受け入れられるのだという経験をし、ありのままに受け入れられるけれど他の子のことも考えないといけないという他者認識を持つようになります。子どもにも自覚、自省、自制、自発、自学自習、自己責任を身に着けさせて、人格を育てます。幼稚園の代わりや、幼稚園の予備校ではなく、人格を育てて、その子どもを神の前に立つところまで導くための働きです。み言葉を教

えて信仰に導くには、まず、人格が目覚めていないとできないのです。言葉がまだ理解できない子に、言葉で宣教はできません。言葉を教えてからなら、宣教することができます。同じように人格の目覚めていない子が、悔い改めることはできません。子どもの人格が目覚めて、自己責任を取るに至って、悔い改めに導くことができます。

### ●モンテッソーリ幼児童学習室

毎週水曜日午後3時  
30分～5時30分までは、就園児童と小学生のクラスです。モンテッソーリ法に、竹馬、一輪車、縄跳び、自転車など外遊びが加わります。できないことや、したことのないことに挑戦して、できるようになってゆきま



モンテッソーリ学習室

す。最近コンピューターで制御するロボットの工作が加わりました。この働きは、脳に新たなルートを作る訓練になります。

### ●日曜子ども食堂

毎週日曜日午後6時～8時に、子ども無料、大人三百円で、バイキング形式の食べ放題の食事提供をしています。毎週、四十数名が集まって、大賑わいでした。しかしそのためには、食品衛生責任者の資格や保健所の営業許可を必要としますし、新たな手洗い場、食器洗い機などを備えなえなければなりませんでした。モンテッソーリ教室の方は、お母さんが働いていない人でないと、子どもを連れて来ることができませんが、子



子ども食堂

ども食堂の方は、お母さんが働いている家の子どもたちにも届きたいと願って始めたミニストーリーでした。食事をとった後に、紙芝居等で聖書の話をしたいと思っていましたが、毎回それどころでない忙しさで、とうとうできずじまいでした。

## Ⅱ. 日曜日のプログラム

### ●ゴスペルタイム

毎週日曜日午前11時45分～正午まで、求道者と子どものための礼拝をしています。シンブルに賛美と祈りと説教が行われます。幼児から大人の求道者まで、礼拝後に残って行われ、牧師が説教します。



ゴスペルタイム

### ●キッズパレット

毎週日曜午後12時～午後12時45分まで、教育館で行われる子どものプログラムです。人格教育のテキストの時間（オリジナル人格教育のテキストが5学年分あります）、その後に製作やゲームの時間になっています。女の子はビーズや缶バッジなどの工作、男の子はロボット工作などがお気に入りです。神様は創造者ですので、神の似姿とは、自分で何かを造り出すということも含みます。人間関係を結ぶことや、何かを造り出すことは、簡単なことではなく、そのことによって人格の成長を図れます。



キッズパレット



## ●中高中生会

毎週正午～12時45分まで、中学生・高校生のためにバイブルスタディーがあります。初心者のためのバイブルスタディーのテキストで牧師が担当しています。

## Ⅲ・年間行事

### ●教育講演会

毎年三月の終わりに、教育講演会&卒業入学祝い&モンテッソーリ学習室入学説明会&スイーツバイキングを開催しています。牧師が、人格教育とは何かという講演をして、スイーツバイキングによって卒園や入園のお祝いをいたします。

### ●イースター祝会

毎年四月の第三週には、イースター礼拝の後、近所の公園でエッグハンティングをしました。卵の形をしたプラスチック容器の中にクイズが入っており、それを隠しておきます。子どもたちは、それを探し当てると、本部にもってきて中身のクイズを取り出します。それに答えることができると、キャンディーのつかみ取りがで

きます。その後、ランチ&スイーツバイキングがあります。

### ●デイキャンプ

毎年7月の末に、日帰りのキャンプを行っています。教育館で、紙芝居で聖書のお話しをして、その後に親子で製作をします（ウチワ作りや万華鏡づくりなど）。その後、駐車場に作っておいだ大きなビニールプール3つで水遊びをし、スイカ割りもします。その後にバーベキューと流しソーメンで、夕食をとります。その後、礼拝堂で人形劇とかけん玉、腹話術、手品などのパフォーマンスを呼んで演技を鑑賞します。

### ●幼児祝福式

毎年十一月の第二週の日曜日は、礼拝後に幼児祝福式とその後にはランチ&スイーツバイキングの時をもつていきます。7歳以下の幼児を対象に、一人ひとり頭に手を置いて神様に子どもたちの祝福を祈り、お祝いをあげるようにしています。その後、キッズパレットを体験する機会にしていますが、当日の参加者は何十人もありました。



が、その後、求道して教会に来る人はありませんでした。

## ●クリスマス祝会

毎年十二月の第三週は、クリスマス祝会です。礼拝後にランチをともし、人形劇（人形劇のオリジナル台本が十数本あります）やゲーム、ハンドベルクワイヤーの演奏を楽しみます。人形劇とハンドベルクワイヤーは、老人ホーム等に慰問します。子どもたちは朗読劇や手話賛美を披露します。この働きも沢山の人が集まっていますが、続いて教会に集う人は起きませんでした。



ハンドベルクワイヤーの慰問

## ●新型コロナウイルス対策

これらの子どもに対する宣教は、新型コロナウイルス対策で全て休止中です。人が集まることが善とされない事態ですから、YouTubeなどで各家庭に入っていく子ども宣教が有効だと考えています。

（森沢尚生）



人形劇

\*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電 話 (078) 575-5511  
F A X (078) 575-6611

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

電話（〇七八）五七六一三九六一  
\*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み